

して榛原村下井足の高野伊三郎に嫁せり。家赤貧にして夫は癩癩を患ひて虚弱且つ穢に小作農を以て生計を立てたり。然るにつぎは夫に貞節を盡し、姑に仕へて篤孝なり。文久元年三月姑やす眼病を患ひ、盲目となり、身體の自由を失ふに至り、家計益々窮せり。翌年八月夫伊三郎歿して不幸交、臻り一家は盲目の姑と二人の幼児とありて、その悲惨名狀すべからず。殊に姑は性嚴なりしかども、つぎは堅忍よく病姑を慰め、嘗てその意に背きし事なく、十有六年の間至孝渝ることなし。人相傳へて感歎せざるはなかりき。今その事蹟の一二を擧ぐれば、夫に死別せる後、殆ど活路を失したるを以て、つぎは朝未明に起きて食事を整へ、長男を背負ひ、内牧村大字荷阪へ約四十町の難路を冒し、炭擔ひに行き、午前十一時頃自宅まで擔ひ歸りて中食をなし、更に磯城郡朝倉村大字黒崎まで二里餘の地に運び届け、賃金として僅かに白米一升を得、夕方歸宅して夕飯を喫し、母を負ひ隣家に連れ行きて入浴せしめ、夜は仕立物等をなし、十一時頃より早く寝ねし事なく、如何なる風雨寒暑をも厭はざりき。病姑は甘き物を嗜好せしを以て、黒崎通ひの際、毎に僅かの賃金を割きて、黒崎饅頭を買求め、これを進むるを例とせり。又病姑には特に

食物を精選し、麥飯等を供したることなかりきといふ。然るに病姑は老衰に因り、明治八年三月より起臥自由ならざるに至れるを以て、つぎは仕事の傍、看護に勉めたりと雖も、遂に九年九月九十歳にて歿せり。これより後、長男を助け、益々農業を勵みたりしが、明治三十三年十二月七日に至り歿しぬ。生前その至孝を表旌せられしこと再度に及びき。

稲田平部

稲田平部は磯城郡城島村大字忍阪の人にして、家世、農を業とせり。嘗て一日も工匠徒弟となりたることなかりけれど、天資意匠に富み、手工に長じ、その製作するところ殆んど熟練せる工匠の製品に劣らざるものありき。又學識あるにあらざれども、一たび見聞したるものに就きては、能くその事理を解し、直に器物を模造し、或はこれに改良を加へ、或は別に創造するの能あり、且つ、苟も心に企畫するところのものは、その目的を達せざれば已まざるの概ありき。青年より老年に至るに従ひ、技巧製作益々妙境に入り、人みな以て奇とせり。平部二十三歳のころ、壺阪寺

寶珠院の僧某縁故ありて屢來り遊び易方位天文等を説くを聽きて大に感ずる所あり工夫を凝らして遂に渾天儀を擬製し親戚故舊郷黨に示し四季晝夜の轉換日蝕月蝕等の由來を説きて自ら樂みとせり。偶明治三年その姪村井某より觀象圖說所載の地動説を聽き翻然として從來唱へたりし天動説の誤謬を悟り夙夜工夫を積み意匠を凝らし兩三年の後遂に天球儀の模型を造り復これを以て世人に説きぬ。その製作古時計の齒車數個を組み合せ佛具の古燭臺を樞軸として古時計の八角側を臺となしたるものにして臺の一方に裝置せる把柄を回轉すればその上部に排置せる地球は太陽を中心として自轉公轉し月球も亦隨つて回轉すその兩者自轉公轉の回數殆んど實際に異ならざりしと云ふ。その後又遊星太陽を圍みて各所定の運轉をなすものを製作し甚だ巧緻を極めぬ時に小學校に於て太陽系に屬する天體の運行を授くるに方り恰好の天球儀なく兒童に理解せしむること困難なりしかば平部が自作の天球儀あるを傳聞し携へ來りてこれが説明をなさんとを乞ふもの頗る多かりき。平部毎に快諾數里を遠しとせず自らこれを負ひ行きて親しく兒童に説示すること懇切を極めたり。明治

九年又晷時計を創造したり。この器は方一尺許の板面に圓を描きこれに分度を劃し圓の中心に針を立てその晷射を見て正時を計るものなり。而してこれを用ゐるには春分より秋分に至る間は板面の北方に於てし秋分より春分に至るの間はこれを南方に於てせり。器成りてこれを郡役所村役場學校等に寄附せり。又これと相前後して里程計を案出せり。この器は一の車輪に齒車を裝置せるものにしてこれをその測量すべき地に曳致し車輪回轉の數を検してその里程を計算し得べきものなりと云ふ。右の外煙火の改良に意を凝らしたることあり。又明治二十三年の頃從來使用せる米搗臼の杵はその先扁平にして米の飛散するごとく且粉米の生ずること多きを憂ひ遂に杵の面の中央を削取して凹あるものを作り實費を以て之を四方に頒ちてその憂を軽くしたる等幾多の公益を圖りたる事蹟少からざるに生涯身を窮巷に處して敢て聞達を求めざりしは誠に感ずべき人なりと謂ふべし。平部明治三十四年五月五日歿せり。年七十九。長男治三郎家を繼ぎ農を以て業とせり。

岡田龜久郎

岡田龜久郎名は保明、弘化二年伊賀國阿拜郡西山に生る。世、津藩士たりしが幼時父に従ひて添上郡古市村に移住し、古市出張所の會計局に出仕せり。明治四年廢藩置縣の際歸農して先づ荒蕪地の開拓に着手しぬ。龜久郎思へらく國産を増し富源を開くには、製茶最有望なるべしと。乃ち貳町餘歩の開墾地に茶種を植付け、専らその栽培法を研究せり。當時その地方に於ては、製茶の業未だ盛ならず、世人皆以て愚なりとなし、に、龜久郎は更に意に介せず、明治十一年内務省勸業局出張静岡縣紅茶傳習所の設置せらるゝや直に同所に就きて製茶法を研究し、翌十二年には私費を抛つて村内に紅茶傳習所を設け、同志を勸誘して其の術を教授し、或は費用を與へて製法練習人を各地に派遣する等、極力斯業の發展に力めたりしかば、遂に嘲笑せしものも、漸次その業の有利なるを悟り、地方の農家争ひて斯業に従事するに至れり。かゝりければ、龜久郎は彌力を得て、進みて貿易の實況を視察せんがために、自ら東京、横濱、神戸等を歴遊し、十四年には紅茶製造所を設

置して、一たび盛況に向はんとせしに、不幸にも製造所火を失して、大部烏有に歸せり。これより先、龜久郎は眼病を患ひて一眼を失ひ、自ら茶樹栽培に従事すること能はざりしに、今又製造所を失ひしかば、暫らく口舌を以て斯業を奨励せんとて、各地に於て晝夜となく茶の製造栽培法を講話したり。後、十七年に至りて、再び紅茶、烏龍茶の製造に着手することを得て、漸く販路の擴張を見たりしに、又もや不幸にして製茶委託販賣店の破産に遭ひ、この効果を全うすること能はざりき。されども、その製茶法は成績佳良の名を得たりしかば、再び東奔西走して同志を求め、新に製造場を設けて、各地に販賣し、又一面には海外直輸出の道を講ぜしが、これ亦幾多の災厄に會して、素志を果すこと能はずして止みにき。さもあれ、その製造品は多大の好評を博し、岡田製一名古市製の名は喧々として全國に喧傳せられしかば、各地より製法の傳習を請ふもの多く、殆んど其の需に應ずるに遑あらず、或は従業者中の熟達のを撰み、自ら費用を與へて各地に出張せしめられたり、苟も餘暇あれば道の遠近と便否とを問はず、病軀を起して敢て自ら傳習の事に當りしが、遂に明治三十四年八月二十日を以て歿しぬ。享年五十七。龜久郎資性

快活にして至誠物に接し、熱心事に従ひ、一旦成さんと志ししことは如何なる困難に遇ひても更に阻むことなく、爲に殆んど家産を傾くるに至りしこと屢なりき。かの茶業組合中央本部の設置、奈良縣茶業聯合會議所の創設の如きもまた與りて力あり、製茶界に於ける功績は最顯著にして賞を受くること前後數十回に及びたり。明治四十年五月、更に農商務大臣より追賞の恩典に浴せり。今茲にこの褒狀を録す。

夙ニ心ヲ茶業ニ注ギ、荒蕪ヲ開墾シテ茶樹ヲ栽培シ、製茶ノ方法ヲ研究シテ同志ヲ勸誘ス、疾病ニ罹ルモ意トセズ、災害ニ遇フモ撓マズ、家産ヲ投ジテ惜マズ、開港場ヲ歴遊シテ實況ヲ視察シ、以テ其地方茶業ノ指南トナリ、刻苦經營、日モ亦足ラズ、奈良縣今日ノ茶業其力ニ負フ所多シ、其功績永ク芳シ、仍テ茲ニ銀杯ヲ贈リテ之ヲ表彰ス。

千葉清宗

千葉清宗は、文政三年八月八日十津川永井に生る、幼名小三郎、後定之助と稱し、又

清宗と名づく、父は定之助といひ、十八歳の時郷を出て江戶及び京都に遊ぶ事九年、弘化四年に歿せしかば、清宗その職を襲ぎて里正となりぬ。米艦渡來後、郷友と共に京師に出て國事に奔走せしが、文久三年六月十一日の御沙汰書を拜せし時は、清宗偶郷にありき、その報に接するや、直に上京し、七月二十六日、野崎主計、佐古高郷と御沙汰の趣を在郷の者に報告し、且つ人数繰出しのため歸途に上り、大阪にて土佐の吉村寅太郎を阪地の旅宿に訪ひ、國事に盡力せんことを約せり。八月十一日、御守衛人數の先發として京都に向ひぬ。天誅組敗るゝに及び、命を奉じて郷民を浪士と分離せしめんとし、歸途高取に至りぬ。偶、藤堂藩はこの地にありて一行を護送せしが、紀州領廣原村に到るや、隊長某、紀藩に降参せば庇護を與へて十津川郷まで送り遣すべしといふ。清宗その無法を詰りしかども、可かず、清宗等を捕へて和歌山に監致し、繋留すると二十八日に及び、鎮靜使來るに及び、かの隊長は無禮を責問せられ、老臣謝書を呈せりといふ。爾後禁闕御守衛に従事し、鷲尾侍從高野山に據るや、又馳せてこれに赴き、輔翼參謀の職を命ぜられたり。明治元年正月命を受けて五條代官所に出張し、軍務に従事せしが、忽ち嫌疑を受

け所内の一室に監禁せられぬ。清宗冤を訴へんとして室を破り、京都に至りしに、復拘留せらるゝこと數月、破牢の罪を以て郷里に蟄居申付けられ、同年八月に至りて免されたり。明治四年積年王事に勤勞せし功によりて金二百兩を給はりぬ。爾來清宗病を養ひて郷里に閑居せり。二十八年七月特旨を以て位記を賜ひ、從六位に叙せられ、三十五年六月二十八日病みて歿しぬ。年八十四。長子貞幹家を繼ぐ、現に從四位勳三等大分縣知事たり。

藤田孫太郎

藤田孫太郎は紀伊の國伊都郡の一貧工藤次郎の第二子なり。天保十二年八月七日生る。二十七歳の時母を喪ひ、翌年父を喪ふ。葬終て高田町に移り住せり。孫太郎性朴直、工夫力に富み、發明する所多し。明治五年梓繰器を發明し、九年三月繰器を發明し、十六年四月大形早繰器を發明せり。大形早繰器は一日總糸六貫目餘を繰るべし。時に總糸を繰りて活計とする者、是によりて其の業を失はんことを恐れ、密に黨を結びてその器械を毀ち、孫太郎を殺さん事を謀りぬ。されど警吏の防備

嚴なりしたため、終に事なきを得たり。十八年五月に至り、更に綿フランネル燃糸機械を創め、十九年七月二日綿糸燃糸蒸汽機械を發明せり。二十七年二月上旬始め一馬力の蒸汽機械を備へ、二週日の間試運轉をなし、その繰り上げたるもの、岩國縮、高島縮に彷彿し、しかも遙に優品たりき。後又一器械を發明せり、其の裝置たるや、一たび動力を通ずれば、梭走り、經緯共に動き、繰るに従ひて自ら巻き、緯の斷ゆるときは直に運轉止み、これを補修すれば運轉することとの如し、人呼んで自由機と云ふ。明治三十六年十二月歿しぬ。

春木義彰

春木義彰通稱を雄吉といふ。法隆寺村の人。弘化三年正月元日に生る。文久三年其の師伴林光平南山の義舉に投じ、翌年京都の獄に死するを見て、慷慨禁ずる能はず。乃ち遺志を繼いで、身を以て王事に委せん期とを期しぬ。慶應元年走つて京都に入り、或は七卿に太宰府に従はんとし、或は北島治房に九州に會せんとし、幕吏の警戒偵捕を避けつゝ、幾多の患苦を経て、四方の志士と交りぬ。慶應三年鷲尾侍

従の密勅を奉じて兵を高野山に擧ぐるや、義彰は尾崎秀民と大阪にありて軍資調達、京阪視察の任に當りぬ。明治元年正月二日、徳川慶喜鳥羽伏見兩道より入京せんとするに及び、義彰は同志と共に高野に入らんとして、途に紀伊見峠に脱兵等と血戦し、南山鎮撫使の感賞を得たり。後、錦旗奉行、總軍兵糧奉行等を命ぜられ、尋で五條屯在兵處分を命ぜられ、措置宜しきを得て資金を賜はりぬ。六月軍務官より錦旗を江戸城へ護送することを命ぜらる。到れば則ち奥羽追討軍從軍を命ぜられ、白河口軍務應接掛兼書記となる。奥羽全く平ぐに及びて京師に還る。二年六月兵部省の命を受けて十津川郷士を説諭す。蓋し郷士の伏見兵營にあるもの兵制改革の令に服せず、往々脱營するものあり、官鎮撫に苦みたればなり。義彰郷中の先輩と協議し、懇諭して彼等を歸營せしめたり。十一月鷲尾少將に従ひて十津川の戸口境域を査覈し、翌年五條縣の設置せらるるや、又知事鷲尾少將を輔けたり。四年三月又十津川郷民の外山光輔、愛宕通旭等の隱謀に與せんとするものを懇諭して、鎮撫功の奏しぬ。十一月五條縣權少屬に任ぜらる。翌五年二月、奈良縣權大屬に轉じ、九月大屬に進み、六年三月更に司法權少檢事に轉ず。尙來常に司法

の職にあり、累進して二十五年には從四位勳四等檢事總長たり。三十六年には從三位勳二等東京控訴院長たり。同年休職を命ぜらる。時に年五十八。三十七年八月貴族院議員に勅選せられ、九月正三位に叙し、十二月十七日、病革るに及びて、更に從二位に進められて重光旭日章を賜はり、同日歿しぬ。享年五十九。

前田隆禮

前田隆禮初の名は正人、吉野郡十津川郷風屋の人。嘉永元年八月十二日を以て生れぬ。父を利一といふ。隆禮文久三年年甫めて十六、京都に至りて禁闕守衛の命を拜し、八月歸郷の途次、天川辻にて天誅組に加はり、共に進んで高取城を攻めしが、敗績して郷里に退去す。元治元年二月より、津藩の劔客清水勝太郎に従ひて、撃劍を學び、十一月歸郷して文武館に入り、漢學及び武技を兼修し、慶應三年四月、江戸薩邸に往き、平元良藏に就きて英式の操練を學びしが、十二月薩邸砲撃の變あり、隆禮は修験者に變裝して備に艱苦を嘗め、辛うじて京邸に歸ることを得たり。明治元年三月、伏見練兵場に入營して嚮導官を命ぜられ、六月より越後に出征し、半

隊司令官となりて各處に轉戦し、十二日歸營せり。この役越後新屋に於て右股に銃創を受けたり。二年七月北越の戦功によりて高四十石永世下賜せらる。三年十二月十八日暴徒鎮撫のため豊後日田縣へ、中尉職務を以て出向を命ぜられ四年歸營、大尉職務となる。五年陸軍歩兵中尉に任ぜられ、八日對州に出向し、九月陸軍歩兵大尉に任ぜらる。七年二月佐賀賊徒征討に出向し、四月臺灣征討軍に従ひ、九年八月戸山學校に入學し、十年二月復隊せしに會し、西南の役起り、三月一日より鹿兒島征討に従軍し、各地に轉戦し、十二月四日凱旋せり。この役肥後國境村にて左股銃創を受けたり。十一年七月臺灣蕃地及び佐賀役從軍につき徽章金圓を賜はり、鹿兒島征討に盡力尠からざるにつき勳五等に叙し、年金百二十圓を賜はりぬ。爾來累進して從五位勳四等歩兵大佐となり、歩兵第八聯隊長たり。廿八年四月十一日宇品港を出帆して征清の役に従ひぬ。十八日清國柳樹屯に上陸して、進みて海城鳳凰城方面の守備に任じ、十一月廿日大阪に凱旋せり。廿九年一月六日又臺灣賊徒征討の爲に出發して蘇澳に上陸し、冬瓜山、宜蘭、礁溪頭附近に戦ひ、七月七日大阪に凱旋せり。この年六月勳四級金鷄勳章を下賜せられ、十月歩兵第四十八

聯隊長となる。三十二年九月陸軍少將に任じ、歩兵第十八旅團長となりて敦賀に赴き、十一月正五位に叙せらる。三十六年八月臺灣混成第二旅團長に補せられ、十一月勳三等に叙し瑞寶章を賜はる。三十七年十一月歩兵第二十二旅團長となり、宇品港を出帆して旅順攻撃軍に従ひぬ。旅順攻圍中、東雞冠山及び望臺を奪取せんとて非常に苦心し、中央縱隊と交代して一戸堡壘を守備するに至るや、他の將校等の異議多かりしに拘らず、自ら士卒に先んじて勞作し、百難を排して十五瓏臼砲を同砲壘に引き上げしめ、望臺の脚圍壁及び東雞冠山北砲臺の背面へトン體を砲撃せしめ、常に兵卒の傍にありて監視したりしが、その砲撃の效果頗る顯著にして、臼砲を敵陣地に接觸せしめて砲撃するは無謀なりとの異議を打消すに至りきといふ。三十八年一月旅順開城後、遂に旅順内に入らずして曰く、旅順を見んが爲に戦争するにあらず、既に我が占領に歸したれば、何が爲にかその地を見物するの必要あらんと、その北進するに當り、氣候尙零度下十五度より三十度の間にありたれば、歩行するものも手足冷却して殆んど歩むに堪へず、乘馬士官は皆徒歩するに至りたるに、將軍は行程百三十餘里の間、山に登り谷に下り一ヶ

月の日子を經過したるに、一度も馬を下らず、偶、副官にして徒歩の暖さを説くものあれば、これを却けて曰く、乗馬官は馬を下るものならずと。城廠より北進して戦闘するや、常に兵卒と同じく携帶天幕の内に起居し、副官等の舎營せられん事を勸むるも、決して民家に入らず。又三龍峪の戦闘の際、感冒にて熱高かりしかども、決して山上を下らず。常に曰く、兵卒と困苦を共にし、兵卒が行く所は最前線まで進むが我が任務なりと。二月二十三日より清河城附近を攻撃し、奮戦三日に亘りて、小旅順と云はれたる堅壘を奪取せり。更に進んで奉天の大会戦に参加するに及んで、救兵臺の苦戦あり。連戦四日、三月四日より七日に亘りて、頑強なる敵兵に當り、突撃夜襲を重ねて、辛うじて彌山を奪ひ、石山を占領するを得たりと。雖も、爲に隊長副官の外、將校悉く戦死したり。かゝる苦戦悪闘の間にあつても、元氣旺盛、舉措平生の如く、かの石山占領の際、敵陣より僅に五百米突なる高地にありて、諸兵を指揮し、常に起立して敵を瞰視せしに、偶、伏姿勢となるや、不幸にして、敵彈右前額頂部を貫通して重傷を負ひぬ。乃ち第十一師團衛生病院を経て五龍口定立病院に後送せられ、治療効あり、稍、輕快に向ひしに、不幸にも肺炎を併發し、二十六

日遂に心臟麻痺に陥り、五十八歳を以て歿したり。病革るに當り、中將に任ぜられ、正四位勳二等功三級に叙し、金鷄勳章を授けらる。その葬儀に當りては、勅使代理天神山なる前田邸に臨まれ、陛下より紅白絹及び金七百圓の恩賜あり。嗣子勇父の勳功によりて特に男爵を授けられぬ。將軍又書畫を嗜み、特に馬を畫くに巧にして、陣中閑あれば筆を揮ひきいよ。又常に酒を嗜みしが、已に戦闘開始となるや、將士多くは酒を被りて氣力を助くるに反し、將軍は一滴をも飲まずして曰く、酒は時に精神を錯亂することあれば、大事の前に當りてはこれを飲用すべき者にあらずと。往年遼遼問題に關し世論益々たりし時、一日盡馬に題して曰く、

滿州原野必爭地、休嘆如今奏効空。

若有露兵窺此土、再鞭汗馬入遼東。

と、また以て將軍氣慨の一斑を想見すべし。

吉田正義

吉田正義は十津川村小原の人、天保八年十月二十日を以て生れぬ。幼名源五郎通

稱俊男といへり。文久三年國家の形勢不穩なるを見て、王事に盡さんと覺悟し、郷友野崎主計、深瀬繁理等と共に上京し、爾來十津川郷に係る事務を處辨しぬ。天誅組一敗の後、十津川郷中人心不穩なるに際し、千葉正中等と共に、鎮靜使を派遣せられんことを歎願し、その許可せらるゝに及び、上平主税その外同志と、文武館を創立せり。同年七月長州藩人闕下に發砲し、京師大に騷擾するに當り、十津川郷人も同類ならんと疑はれ、隨意歸郷すべき由内諭を受けたるが、方今國家多事、殊に闕下騷擾に當り、徒に無實の嫌疑によりて、闕下を去るべからず、唯御守衛の任を盡すこそ臣子の本分なれと答へたるに、後數日、改めて下賀茂神社御警衛を仰付けられ、慶應元年、更に議奏衆の警衛を仰せ付けられぬ。同三年、鷲尾侍從の密詔を奉じて兵を高野山に出し、時には、京都に留りて通牒の事を掌りぬ。明治元年前、倉温理と奈良に至り、奉行小俣伊勢守に説きて銃器彈藥を高野山の本營に送らしめ、その附屬の與力同心の者を糾合し、興福寺内の寺院及び奉行屋敷を十津川陣營となし、東西賊徒應援の通路を絶てり。同年正月太政官に於て十津川郷士取締仰付けられ、七月東北遊擊軍將久我大納言に隨從し、十一月京都に還り、二年二

月伏水練兵場學校御用掛申付られ、六月軍事盡力の爲金百圓を賞賜せらる。三年兵部省十津川出張所に於て、沖垣齋宮等十三名と、人選に自恣の取計ありしとて百五十日謹慎申付けられしが、後、又軍監陸軍掛となれり。十二月辨官より積年王事に勤勞せる廉を以て終身八人扶持を賜りぬ。四年兵部權中錄、五年陸軍權中錄、宮内少監雜掌、司法省九等出仕等に歷任し、六年司法省權少檢事となりてより、専ら司法の職にあり、各所に轉任累進して、十五年勳六等に叙せられ、十六年大阪始審裁判所奈良支廳長となり、十七年大阪始審裁判所詰を命ぜられ、十九年非職仰付られたり。二十二年又奈良縣宇智吉野郡長に任ぜられ、二十五年勳五等に叙し、瑞寶章を賜はり、二十九年職を免ぜられ、四十一年三月二十日特旨を以て位二級を進められて從五位に叙し、同日五條町の寓居に病歿す。二十四日十津川小原に歸葬せり。年七十二。

前部重厚

前部重厚、幼名吉次郎、横塘又棕廬と號せり。高市郡小房の人家は世、高取藩下の大

庄屋たり、幼にして學を嗜み、殊に書を善くす。三山夙に出藍の才あるを見、その姪を妻はす。一旦大阪に至りて小竹の教を受け、學益進みて、慶應の初め芝村藩儒となり、維新の後種々の公職を奉じ、或は私宅にて育英の事に當りしが、明治四十一年三月八十一歳を以て没せり。

明治時代略年表

- 明治元年正月二十一日 大和鎮臺を置かれ、久我通久之を督す。
- 二月一日 大和鎮臺廢せられ、久我通久大和鎮撫總督に任せらる。
- 五月十九日 奈良縣を置かれ、藩領以外の地を管す、春日仲襄久我建通家士
- 七月二十九日 奈良縣改りて奈良府となり、園池公靜知事に任せらる。
- 二年 三月六日 十津川郷士多年勤王の勞を賞し、米五千石を賜ひ、其豪族十名を中士に班し、兵を出して京師に宿衛せしめ、其地を奈良府に屬せらる。
- 三月十四日 刑法官知事大原重徳、奈良府知事園池公靜等を遣して、十津川を巡撫せしめらる。
- 五月二十七日 十津川郷の奈良府所轄を更めて、軍務官に隸せらる。
- 六月十七日 勅して諸藩版籍奉還の請を聽し、知藩事を置く、大和に

七月十七日 三府の外悉く縣となり、園池公靜奈良縣知事に任ぜらる、

十二月廿四日 陸軍少將正親町公董、五條爲榮、鷲尾隆聚京都、伏見、十津川に更番せらる、

三年 二月二十七日 五條縣を置き、陸軍少將鷲尾隆聚知事に任ぜられ、兵部省十津川出張所廢せらる、

四月二十七日 高野山堺縣を五條縣に屬せらる、

八月十九日 海江田信義、奈良縣知事に任ぜらる、

四年 五月十四日 神社の班位を定められ、大神神社、外六社、官幣大社に列せらる七年、淡山神社、別格官幣社に列し、二十九年、丹生川上神社は上下二社に分る、

七月十四日 列藩を廢して縣を置かる、

八月四日 四條隆平、五條縣知事に任ぜらる

十一月廿二日 奈良縣を置かれ、四條隆平、奈良縣令に任ぜらる、

六年 六月四日 奈良縣令四條隆平、皇上の照影を下賜せられ、人民をして瞻拜せしめんことを請ひて允さる、爾後相繼いで各府縣に賜ふ、

十一月二日 青山貞、奈良縣權令に任ぜらる、

同 十九日 堺縣參事藤井千尋、奈良縣權令に任ぜらる、

八年 四月一日 奈良博覽會を二ヶ月間大佛殿に開く、後年々開いて明治三十一年に至る、

九年 四月十八日 奈良縣を堺縣に併せらる、税所篤、堺縣知事たり、

十年 二月 天皇陛下大和に行幸あらせ給ふ、七日京都御發齋、宇治御泊、八日奈良御着齋、東大寺東南院に入らせ給ふ、九日春日神社御參拜、博覽會場正倉院等を覽給ふ、十日奈良御發齋、今井御泊、十一日畝火東北陵御參拜、十二日今井御發齋、堺に向はせ給ふ、

十四年 二月七日 堺縣大阪府に併せらる、建野郷三、大阪府知事たり、

二十年 十一月十日 大阪府を削いて奈良縣を設置せられ、大和全國を管す、
 税所篤奈良縣知事に任ぜらる、

二十一年二月十七日 市町村制を公布せられ、町村の分合あり、

二十二年六月二十八日 吉野宮官幣中社に列せらる三十四年八月十三日官幣大社に昇格

八月十九日 十津川水害、此歲十一月被害人民北海道に移住す、

十二月廿六日 小牧昌業奈良縣知事に任ぜらる、

二十三年三月二十日 橿原神宮官幣大社に列せらる、

四月 皇后陛下大和に行啓あらせ給ふ、十八日、京都より奈良に御着、奈良俱樂部に入らせ給ふ、十九日春日神社御参拜、二十日談山神社御参拜、櫻井御泊、二十一日畝火陵御参拜、吉野御泊、二十二日田原本御泊、二十三日法隆寺御泊、二十四日大阪に向はせ給ふ、

十二月廿七日 奈良王寺間鐵道開通二十五年二月二日總瀬、三月五日開通、大阪に連絡す、

二十四年三月一日 王寺高田間鐵道開通、

四月一日 府縣制郡制實施、郡の分合あり、縣下十郡となる、

十一月 皇太后陛下大和に行啓あらせ給ふ、四日京都より奈良に御着、奈良俱樂部に入らせ給ふ、五日春日神社御参拜、六日正倉院御覽、七月初瀬御泊、八日談山神社御参拜、今井御泊、九日畝火陵御参拜、法隆寺御泊、十日大阪に向はせ給ふ、

二十六年五月二十三日 高田櫻井間鐵道開通、

二十七年一月二十日 古澤滋奈良縣知事に任ぜらる、

八月一日 清國に對し宣戰の詔勅を公布せらる、二十八年四月十日 七日媾和條約成る、

二十八年四月二十九日 奈良帝室博物館開館

二十九年四月十八日 水津奈良間鐵道開通京都、郡、連絡す、

五月十日 高田、葛間鐵道開通、十月二十五日葛五條間鐵道開通、

十二月廿六日 水野寅次郎奈良縣知事に任ぜらる、

三十一年三月一日 奈良市制施行

五月十一日

京終櫻井間鐵道開通三十二年十月十四日

三十一年十月二十八日 皇太子殿下畝火陵御參拜、奈良御泊、三十日御發、

三十二年二月二十一日 寺原長輝奈良縣知事に任ぜらる、

三十三年五月二十八日 皇太子殿下御慶事に付畝火陵御參拜、

三十六年六月十二日 河野忠三奈良縣知事に任ぜらる、

十月七日

皇太子殿下關西地方御行啓に付奈良御通過、

三十七年二月十日 露國に對し宣戰の詔勅を公布せらる、三十八年八月二十九日媾和條約成る、此戰役、縣下の戰病死者七百二十

餘人、

三十九年七月二十八日 川路利恭奈良縣知事に任ぜらる、

四十一年七月二十日 青木良雄奈良縣知事に任ぜらる、

十一月十日

陸軍特別大演習あり、十一月天皇陛下奈良に行幸あら

せ給ひ、大本營奈良俱樂部に入らせ給ふ、十二月耳成山に、十

三日帶解に、十四日川合に、大演習を御統監あらせ給ふ、
十五日閱兵式、十六日神戸に向はせ給ふ、

大和人物志 終

系 譜

華嚴宗東大寺別當次第

(創立年時) 聖武天皇天平十七年
(現今位置) 大和國奈良市

一、良辨 天平勝寶四、五、一任
寶龜四、閏十一、十六寂 — 二、良興 天平寶字五、任 — 三、良惠 天平神護元、任 — 四、永興 寶龜元、任

五、忠惠 寶龜五、任 — 六、靈義 寶龜九、任 — 七、等定 延曆二、任
延曆十九、七、寂 — 八、永覺 延曆六、任

九、禪雲 延曆十、任 — 一〇、堪久 延曆十四、任 — 一一、源海 延曆十八、任 — 一二、定興 延曆廿二、任
延曆廿四、十二寂

一三、海雲 大同元、任 — 一四、空海 弘仁元、任
承和二、三、廿一、寂 — 一五、義海 弘安五、任 — 一六、靜雲 弘仁十、任
弘仁十二、十一寂

一七、永念 弘仁十三、任 — 一八、興雲 天長三、任 — 一九、寬雲 天長七、任 — 二〇、心惠 承和元、任

系 譜

二、實敏 承和五、任
三、正進 承和十、任
三、真雅 承和十四、任
二、四、貞崇 仁壽元、任

二、五、濟棟 齊衡二、任
延喜五、六十八寂
二、六、真昶 貞觀元、任
二、七、祥勢 貞觀十三、閏八、十四、任
仁和元、任
二、八、玄津 貞觀十七、四、廿八、任

二、九、真昶 元慶三、二、四、寂
三、〇、安軌 元慶四、四、九、任
三、一、祥勢 元慶五、八、十九、任
寬平七、寂
三、二、勝皎 寬平二、三、十五、任
寬平二、五、廿二、寂

三、三、惠珍 寬平二、九、十五、任
昌泰三、二、廿六、寂
三、四、濟棟 寬平六、六、廿七、任
延喜五、六、十八、寂
三、五、道義 昌泰元、八、八、任
延喜五、寂
三、六、戒撰 延喜五、三、十七、任

三、七、延惟 延喜九、四、廿七、任
三、八、智鏡 延喜十二、正、廿一、任
延喜八、八、八、寂
三、九、親宥 延喜十九、十二、七、任
延喜六、八、廿六、寂
四、〇、延傲 延長二、三、三十、任
延長七、十二、二十三、寂

四、一、基遍 延長六、二、九、任
四、二、寬救 延長六、六、十七、任
四、三、明珍 承平六、十一、廿九、任
天曆八、十二、二十三、寂
四、四、寬救 天慶八、任

四、五、光智 天曆四、五、廿六、任
天元二、三、三十、寂
四、六、法藏 康保三、二、二十四、任
安和二、二、三、寂
四、七、觀理 安和二、寂
天延二、寂
四、八、法緣 天德二、五、十七、任
天元三、十、寂

四、九、湛照 貞元三、九、十七、任
寬和三、寂
五、〇、寬朝 永觀二、二、廿三、任
長德四、六、寂
五、一、育然 永延三、七、十、任
長和五、寂
五、二、深覺 正曆三、七、八、任

五、三、平崇 正曆五、七、廿一、任
五、四、深覺 長和四、十二、十六、任
五、五、雅慶 長保元、八、九、任
長和元、十、廿五、寂
五、六、濟信 寬弘二、十二、廿六、任
長元三、六、十一、寂

五、七、澄心 寬弘四、四、七、任
長和五、二、廿五、寂
五、八、清壽 長和五、四、廿七、任
長和五、四、廿七、寂
五、九、深覺 長和五、五、十六、任
長久四、九、十四、寂
六、〇、朝晴 寬仁四、十二、三十、任
治安元、四、一、寂

六、一、觀眞 治安三、八、廿二、任
長元二、三、十九、寂
六、二、仁海 長元二、六、廿三、任
永承元、五、十六、寂
六、三、濟慶 長元六、二、二十、任
永承二、十、一、寂
六、四、深觀 長曆元、十二、廿九、任
永承五、六、十五、寂

六、五、尋清 永承四、十二、廿八、任
永承六、六、十八、寂
六、六、有慶 永承六、五、廿三、任
六、七、覺深 天喜三、八、廿七、任
治曆元、八、十六、寂
六、八、延幸 康平二、十二、廿四、任
治曆二、十二、廿一、寂

六九、有慶再任——七〇、信覺延久三、二、廿二任 應德元、九、十五寂——七一、慶信承保二、正、十四任——七二、經範嘉保二、六、廿二任

七三、永觀康和二、五、廿一任——七四、勝覺長治元、五、廿九任——七五、寬助元永元、四、廿八任 天治二、正、十五寂——七六、勝覺再任 天治二、七、廿任 天治四、四、一寂

七七、定海大治四、五、廿一任 久安五、四、十三寂——七八、寬信久安三、正、十四任 仁平三、三、七寂——七九、寬曉仁平三、三、十一任 平治元、正、八寂——八〇、寬遍平治元、三、廿八任 永萬二、六、三十寂

八一、顯惠永萬二、七、五任 安元元、二、廿三寂——八二、敏覺安元元、三、四任 養和元、十、二寂——八三、貞喜治承元、任——八四、定遍壽永二、任 天治元、十二、十八寂

八五、雅寶文治二、三、七任 文治五、五、十三寂——八六、俊證文治五、五、廿八任——八七、勝賢建久三、八、十八任 建久七、六、廿二寂——八八、覺成建久七、七、八任 建久九、十、廿寂

八九、辨曉建久十、正、十四任 建仁三、七、十一寂——九〇、延果建仁三、七、十三任 元久三、三、十二寂——九一、道尊元久三、三、十七任 安貞二、八、五寂——九二、成寶承元四、四、十七任

九三、定範建保元、十二、六任——九四、成寶再任 承久四、四、四任 安貞元、十、七寂——九五、道尊再任 嘉祿三、十二、二任 安貞二、八、五寂——九六、定豪安貞二、八、七任 建仁元、九、廿四寂

九七、賴惠天福二、上、二任 文曆二、閏六、廿八寂——九八、觀嚴文曆二、閏六、廿九任 嘉祿二、十一、二寂——九九、眞惠嘉祿二、十一、四任——一〇〇、良惠延應元、二、晦任

一〇一、定親仁治二、正、八任 文永三、九、九寂——一〇二、宗性文應元、七、十七任——一〇三、聖基弘長三、任——一〇四、定濟文永四、四、廿二任 弘安五、十三、三寂

一〇五、道融文永十、十二、廿五宣——一〇六、聖兼建治二、十二、廿二宣——一〇七、道寶弘安四、三、五宣 弘安四、八、七寂——一〇八、勝信弘安四、八、四任 弘安十、七、四寂

一〇九、聖兼再任 弘安六、十二、一任 永仁元、九、十一寂——一一〇、了遍弘安十、三、廿三任——一一一、聖忠正應元、九、十任——一二三、賴助正應五、任

一二三、聖惠永仁四、任——一二四、信忠延慶三、三、三任——一二五、實海正和二、十四任——一二六、聖忠正和五、五、十六任

一一七、公曉文保元、任——一一八、教寬元應二、任——一一九、聖尋元享二、任——一二〇、教寬元弘元、任

一一一、聖珍建武元、任——一一二、良性建武三、任——一一三、定曉建武三、七十六宣——一二四、實曉延元元、七廿二宣

一二五、實胤曆應元、宣——一二六、聖珍建永二、八十宣——一二七、寬胤親應元、宣——一二八、聖珍文和元、十九宣

一二九、寬胤貞治六、六宣——一三〇、尊信應安六、九十一宣——一三一、經辨康曆元、十九宣——一三二、觀海至德二、宣

一三三、經辨應永三、四十五宣——一三四、觀海應永六、四宣——一三五、經辨應永九、五四宣——一三六、觀覺應永十四、十二宣

一三七、光經應永廿一、六、十二宣——一三八、尊胤應永卅三、二宣——一三九、房宣正長元、宣——一四〇、公顯永享四、十六宣

一四一、持寶嘉吉二、三十四宣——一四二、珍覺文安元、七、廿二宣——一四三、隆實文安四、十二、十七宣

法相宗興福寺別當次第

(創立年時) 齊明天皇三年
(古昔位置) 山城國山科
(遺跡年時) 元明天皇和銅三年
(現今位置) 大和國奈良市

一、慈訓 ———— 二、永嚴 ———— 三、行賀 ———— 四、修圓
天平字元任 寶龜八寂 延曆十任 延曆廿一、二、八寂 弘仁三任 承和元寂

五、隆慧 ———— 六、壽朗 ———— 七、興昭 ———— 八、孝忠
承和元任 貞觀十四任 貞觀五寂 元慶七、正、廿八寂 貞觀十三年任 元慶六、五、八寂

九、房忠 ———— 一〇、仙忠 ———— 一一、直覺 ———— 一二、基繼
仁和三任 寶平五任 延喜五、六、四寂 延喜十五、十二、一寂 延喜十五、十二、一寂 延喜十五、十二、一寂 延喜十五、十二、一寂

一三、平源 ———— 一四、空晴 ———— 一五、助精 ———— 一六、延空
延長八任 天曆三、五、二寂 天曆三、十二、廿六任 天德元、十二、廿七任 應和元、四十七寂 應和元、七、七寂

一七、安秀 ———— 一八、定昭 ———— 一九、真喜 ———— 二〇、定澄
康保四、七、二十任 天祿二、四、十六寂 天祿二、二、廿三寂 長保二、二、七寂 長保二、八、廿九任 長保四、十一、一寂

二一、林懷 ———— 二二、扶公 ———— 二三、經救 ———— 二四、真範
長和五、五、十五任 萬壽二、四、四寂 長壽二、六、廿七任 長元八、八、廿七任 長元八、八、廿七任 長元八、八、廿七任 長元八、八、廿七任 長元八、八、廿七任 長元八、八、廿七任

二五、圓緣 ———— 二六、明懷 ———— 二七、賴信 ———— 二八、公範
天喜三、正、廿三任 康平三、八、十六任 延久四、八、二寂 康平五、八、十四任 承保三、八、十七任 應德三、十、十九寂

二九、賴尊 ———— 三〇、覺信 ———— 三一、永緣 ———— 三二、玄覺
寬治三、三、十六任 康和二、八、二十任 保安二、五、八寂 保安二、七、廿七任 天治二、四、五寂 天治二、四、廿六任

三三、經尋 ———— 三四、玄覺 ———— 三五、隆覺 ———— 三六、覺譽
大治四、十二、十任 天承二、七、八任 天承二、七、八任 天承二、七、八任 久安二、十二、十五任 久安二、十二、十五任

三七、覺晴 ———— 三八、隆覺 ———— 三九、惠信 ———— 四〇、尋範
久安三、二十三任 久安四、五、十七寂 久安六、八、十六任 保元三、六、四寂 保元二、九、廿五寂 長安二、五、十一任 承安四、四、九寂

四一、覺珍 ———— 四二、教緣 ———— 四三、玄緣 ———— 四四、信圓
承安三、八、廿四任 承安五、十一、八任 治承三、四、廿九任 養和元、正、廿九任 承安五、十一、八任 治承三、四、廿九任 養和元、正、廿九任 真應三、十一、十九寂

四五、覺憲
文治五、五、廿八任
四六、範玄
建久六、十二、廿八任
正治元、六、一、寂
四七、雅緣
建久九、十二、廿任
四八、良圓
建永二、正、廿二任

四九、雅緣
承元二、三、十一任
五〇、信憲
建曆三、十二、四任
嘉祿元、九、十一、寂
五一、雅緣
建保五、十二、十二任
五二、良圓
建保六、十二、廿六任
承久二、正、十四、寂

五三、雅緣
承久二、正、十六任
貞應二、二、廿一、寂
五四、範圓
貞應二、二、九任
五五、實尊
嘉祿二、七、二任
嘉祿二、二、二十九、寂
五六、實信
寬喜二、三、廿一任

五七、圓玄
寬喜四、三、九任
五八、實信
貞永二、三、廿八任
五九、圓實
文曆二、三、四任
六〇、定玄
寬元二、正、十一、寂
寶治元、七、十一、寂

六一、實信
寬元三、十二、二任
六二、覺遍
寶治元、十二、廿八任
正嘉二、七、廿九、寂
六三、實信
寶治二、四、十二、十八任
六四、圓玄
建長元、八、廿任
建長二、十一、廿八、寂

六五、公緣
建長二、正、廿一任
六六、實信
建長二、十、廿八任
建元元、十、十七、寂
六七、親緣
建長五、十、十五任
六八、良盛
建長八、二、廿一任

六九、圓實
正嘉二、十、十八任
七〇、尊信
正元元、十一、廿一任
七一、賴圓
文永三、七、二任
七二、實性
文永五、十二、廿八任

七三、信昭
文永十、四、廿一任
七四、性譽
建治二、八任
七五、尊信
建治四、正、十七任
弘安六、七、十三、寂
七六、信昭
弘安二、十二、十任
弘安九、六、十四、寂

七七、慈信
弘安四、四、十一任
七八、玄雅
弘安五、十二、十九任
弘安六、十二、八、寂
七九、宗懷
弘安六、十、廿八任
正應二、三、廿五、寂
八〇、慈信
弘安九、四、十二、廿五任

八一、尊清
正應元、五、廿七任
正應二、九、二、寂
八二、實懷
正應二、八、十八任
正應四、四、廿四、寂
八三、慈信
正應四、三、廿八任
八四、性譽
正應五、六、六任
建治元、十二、廿二、寂

八五、慈信
永仁元、八、八任
八六、顯覺
永仁三、六、十一任
永仁五、三、三、寂
八七、尊憲
永仁五、三、十七任
八八、實昭
永仁六、六、三任

八九、範憲
正安元、六、二任
九〇、慈信
正安二、十一、四任
九一、經譽
正安三、九、十二任
九二、範憲
寬元元、十一、十五任

九三、覺 昭嘉元元、十一、二任
延慶元、五、十六寂 九四、尋 覺嘉元二、十二、廿九任
嘉元四、五、九任 九五、宗 親嘉元四、五、九任 九六、範 憲德治二、正、八任

九七、良 信德治二、四、廿三任 九八、公 壽德治三、七、十四任
正和四、十、十六寂 九九、尋 覺德治三、十六任 一〇〇、良 信延慶三、三、十五任

一〇一、信 顯應長三、三、十四任
應長三、正、十寂 一〇二、範 憲正和二、七、一任 一〇三、尋 覺正和四、二、十一任
文保二、八、十五寂 一〇四、實 聰正和四、十二、十四任
嘉曆三、正、四寂

一〇五、良 信正和五、十一、廿五任 一〇六、良 覺文保元、十一、三十任 一〇七、隆 遍文保二、七、十六任
建武五、閏七、十七寂 一〇八、良 覺文保二、十一、廿九任

一〇九、覺 圓文應元、十二、廿二任 一一〇、良 覺元享元、二、十六任 一一一、顯 親元享元、九任 一一二、覺 尊元享元、十一、六任

一一三、慈 信元享三、五、九任
正中二、閏正、廿六寂 一一四、良 信元享三、八、十五任
嘉曆四、二、九寂 一一五、顯 昭嘉曆元、十二、廿七任
嘉曆四、八、十六寂 一一六、範 憲嘉曆二、十二、十七任
嘉曆三、十一、十八任

一一七、良 覺嘉曆三、三、三任 一一八、覺 尊嘉曆四、三、廿八任
曆應二、五、十一寂 一一九、良 覺元德二、二、三任
正慶元、八、十四寂 一二〇、乘 圓正慶元、八、十八任

一二一、覺 實元弘三、六、十四任 一二二、覺 圓建武三、十二、三任
曆應三、六、廿九寂 一二三、覺 實建武四、六、十一任 一二四、孝 覺康永二、八、五任

一二五、覺 實貞和二、二、十七任
觀應二、五、廿一寂 一二六、良 曉貞和三、二、六任 一二七、孝 覺貞和三十、廿四任 一二八、懷 雅貞治五、十二、廿五任

一二九、孝 覺應安元、三、五任
應安元、九、十九寂 一三〇、賴 乘應安元、十三任 一三一、盛 深應安三、二、十三任 一三二、顯 遍應安三、十二、廿九任

一三三、盛 深應安五、二、三任 一三四、實 遍應安六、十二、廿六任 一三五、印 覺永和元、八、十二任
永和四、正、十七寂 一三六、隆 圓永和三、十二、廿七任

一三七、實 遍康應元、六、五任 一三八、圓 守康曆二、八、廿七任 一三九、實 遍永德元、四任 一四〇、圓 守永德二、四、十五任

一四一、孝、憲——一四二、覺、成——一四三、覺、家——一四四、圓、兼
至德元、十二、廿五任 至德三、五、三任 至德四、正、廿八任 嘉慶二、二、廿一任

一四五、良、昭——一四六、孝、尋——一四七、長、懷——一四八、孝、尋
嘉慶二、十七任 康熙三、三十二任 明德三、十二、廿三任 應永元、十二、廿三任

一四九、長、雅——一五〇、圓、兼——一五一、良、昭——一五二、實、憲
應永二、十一、十七任 應永四、七、廿八任 應永五、六、四任 應永七、三、十六任

一五三、孝、圓——一五四、圓、尋——一五五、隆、俊——一五六、良、兼
應永九、五、四任 應永十二、十二、十八任 應永十四、二、八任 應永十四、九、卅任

一五七、實、昭——一五八、兼、覺——一五九、光、曉——一六〇、孝、俊
應永十八、三、六任 應永十九、九、廿三任 應永廿一、四、廿五任 應永廿二、十二、廿三任

一六一、空、昭——一六二、光、雅——一六三、隆、雅——一六四、乘、雅
應永廿六、五、十九任 應永廿九、二、九任 應永卅一、五、二任 應永卅二、十二、廿二任
永享元、十一、廿一寂 文正、一、二寂

一六五、經、覺——一六六、昭、圓——一六七、光、曉——一六八、經、覺
應永卅三、二、七任 正長元、三、廿任 永享九、九、三寂 永享二、三、三任
永享五、七、十四寂 永享三、八、二十任

一六九、兼、昭——一七〇、覺、雅——一七一、隆、秀——一七二、實、意
永享七、十二、廿六任 永享八、九、三任 永享九、十二、十二任 嘉吉元、八、十五任
永享八、十三、寂 寬正六、九、廿三寂 享德三、十二、八寂

一七三、俊、圓——一七四、兼、曉——一七五、貞、兼——一七六、重、覺
嘉吉二、三、十六任 寬正二、正、九寂 文安二、四、廿一任 文安五、四、十一任
文明十六、五、十二寂 寶德二、正、九寂 寶德四、四、八寂 寶德二、七、十六寂

一七七、良、雅——一七八、空、俊——一七九、教、玄——一八〇、尋、尊
寶德二、四、廿六任 寶德三、四、廿七任 享德三、三、廿八任 康正二、二、十任
寬正十二、二、廿四寂 應仁三、正、廿四寂

一八一、光、憲——一八二、經、覺——一八三、兼、圓——一八四、兼、雅
長祿三、四、四任 寬正二、二、廿二任 寬正四、六、十三任 寬正六、五、十二任
文明十三、三、廿二寂 寶正二、二、廿二任 寶正四、六、十三任 文明十三、五、五寂

一八五、孝、祐——一八六、經、覺——一八七、光、淳——一八八、任、圓
應仁元、五、廿任 應仁三、三、三十任 文明五、八、廿九任 文明八、三、廿四任
文明五、一、廿六寂

一八九、尊譽——一九〇、政覺——一九一、隆憲——一九二、空覺
文明十二、四、廿八任
文明十五、二任
明應三、三、十六寂
明應六、正、十八任

一九三、光慶——一九四、良譽——一九五、兼繼——一九六、經尋
明應九、二、十八任
永正九、三任
永正十六、六、廿一任
大永二、三、十一任
大永六、八、十八寂

一九七、圓深——一九八、孝緣——一九九、實憲——二〇〇、晃圓
大永六、九任
享祿三、九、八任
享祿五、正、十七任
天文四、二、廿三任

二〇一、兼繼——二〇二、覺譽——二〇三、尋圓——二〇四、空實
天文五、十一任
天文六、十一、十三任
天文十九、三、廿九任
永祿六、四、十二、廿一任

二〇五、光尊——二〇六、實曉——二〇七、光實——二〇八、兼深
永祿十一、八、廿五任
元龜元、十、十一任
天正元、九、十七任
天正十三、四、十八寂
天正十三、十一、廿九任

二〇九、尊勢——二一〇、光助——二一一、信尊——二一二、尊覺
天正十七、八、十六任
元和三、五、三寂
元和四寂
元和五、三十任
延寶四、四、三寂
元和八、十、廿六任

二二三、尊覺——二二四、實雅——二二五、尊賞——二二六、隆遍
承應元、正、二十任
寶文元、七、廿六寂
寶文四、正、十九任
延寶九、正、九寂
正德四、九、廿二任
延享三、十、九寂
元文四、三、十五任
安永六、五、八寂

二二七、尊快——二二八、照尋——二二九、尊應——二三〇、忠起
明和六、十、十任
寶政五、十二、九寂
文化十一、九、二六任
天保十三、三、廿任
元始元、三、二十任

戒律宗西大寺長老歷代

(創立年時) 孝謙天皇天平神護元年
(再興年時) 四條天皇嘉祥
(現今位置) 大和國生駒郡伏見村

一、睿尊思圓 — 二、慈真 — 三、宣瑜淨梵 — 四、靜然良証
正應三、八、廿五寂 — 正和五、正、廿六寂 — 正中二、三、九寂 — 元弘元、十二、十三寂

五、賢善覺律 — 六、澄心靜心 — 七、信昭靜觀 — 八、元耀求覺
曆應三、十、二寂 — 貞和三、九、五寂 — 文和四、十七寂 — 文和四、十七寂

九、眞湛悟妙 — 一〇、清算彦證 — 一一、覺乘慈淵 — 一二、貞祐慈證
延文五、十五寂 — 貞治元、十一、十四寂 — 貞治二、正、廿六寂 — 貞治四、閏九、二寂

一三、信尊道昭 — 一四、堯基尊密 — 一五、貞泉信乘 — 一六、禪譽四宗
貞治五、九、廿寂 — 應安三、四、廿四寂 — 康暦元、六一寂 — 嘉慶二、五、五寂

一七、慈朝祐梵 — 一八、深泉本務 — 一九、良耀淨順 — 二〇、高湛明卯
明德二、四、九寂 — 應永二、九、廿五寂 — 應永十一、二、廿五寂 — 應永十五、九、廿四寂

二一、叡空四遊 — 二二、英如正圓 — 二三、英源四善 — 二四、元空忍照
應永十九、二、廿三寂 — 應永廿二、二、廿九寂 — 應永廿六、十、五寂 — 應永卅、七、廿五寂

二五、榮秀淨會 — 二六、高海本圓 — 二七、良誓淨音 — 二八、元澄眞賢
永享二、八、二寂 — 永享八、四、廿六寂 — 寶徳二、正、二寂 — 長祿元、十一、八寂

二九、高算明圓 — 三〇、仙惠明珠 — 三一、秀如正眞 — 三二、良慶四珠
文明三、十一、十二寂 — 文明十、八、六寂 — 長享二、五、廿七寂 — 明應七、八、七寂

三三、尊海淨宗 — 三四、高仲通圓 — 三五、高森圓宣 — 三六、玄海
文龜二、三、七寂 — 永正六、五、八寂 — 永正八、二、二寂

三七、高實 — 三八、光淳 — 三九、高珠 — 四〇、尊珠

四一、高興 — 四二、尊慶 — 四三、凝海 — 四四、高秀

四五、高久——四六、高仙——四七、尊智——四八、高喜——

四九、賢瑜——五〇、高圓

三論宗東南院門跡歷代(創立年時)
(古昔位置)
醍醐天皇延喜五年
大和國奈其東大寺

聖寶——聖實——聖兼——仁澄——道快
延喜九、七、六寂
永仁元、九十一寂

聖珍——觀海——慶信——良覺——豪因
嘉保二、正九寂

慈快——齊慶——有慶——勝資——聖慶
安元三、三、六寂

覺樹——聖忠——惠珍——(門跡廢絶)
保延五、二、十四寂
嘉應元、十、十五寂

法相宗一乘院門跡歷代

(創立年時) 開明天皇
(古昔位階) 大和國奈具興福寺
(現今位階) 廢亡

定昭永觀元、三十一寂——定好——真範——賴信承保三、六廿三寂——賴尊

覺信保元二、五八寂——玄覺——覺英保元二、二十七寂——覺繼——信圓

良圓承久二、正十四寂——實信——實靜——信昭——隆信

覺惠——覺昭——良信文保三、七十二寂——良覺正慶元、八十四寂——信助延元二、七十九寂

覺實觀應二、五十八寂——玄圓——實玄——良玄——良昭應永九、四廿三寂

玄昭——良兼應永廿一、九廿三寂——昭圓——教玄——信玄

良譽——覺譽永保五、四十五寂——覺慶慶長二、八廿八寂——尊勢——尊覺寶文元、七廿六寂

信敬寶永三、十六寂——尊昭延享三、九十四寂——尊快寶政五、十二九寂——龜代宮——尊誠文政五、八廿四寂

尊常天保七、六廿六寂——尊應——忠起明治元、四廿九復飾——(廢亡)

法相宗大乘院門跡歷代

(創立年時) 關河天皇寬治元年
(古昔位置) 大和國奈良興福寺
(現今位置) 廢亡

隆禪
應和二、七、十四寂

賴實

尋範

信圓

實尊
嘉祿二、二十九寂

圓實
文永元、十一、廿六寂

實信

尊信
弘安六、七、十二寂

慈信
正中元、十二寂

尋覺
久和二、八、廿七寂

尋尊

聖信

孝覺

孝尊

孝尋

孝信

孝圓

經覺

尋實

尋尊

政覺

慈尋

經尋
大永六、七、七寂

尋圓

尋憲

義尋

信尊
延寶四、四、三寂

信雅

信覺

隆尊

隆遍
安永六、五、八寂

隆範
文政十二、九、二十寂

隆實
天保三、十二、廿一寂

隆溫
明治八、三、十六寂

尙嘉
明治元、四、廿九復歸
(廢亡)

新義眞言宗豊山長谷寺能化歷代

(創立年時) 光仁天皇寶龜
(再興年時) 後陽成天皇天正十五年
(現今位置) 大和國磯城郡初瀬町

中興、專 譽宮賢 二、性 盛頼心 三、宥 義玄音 四、秀 算京談
慶長九、五、五寂 慶長十四、七、十六寂 元和四、七、十七寂 寶永十八、十、十六寂

五、尊 慶頼心 六、良 譽曉温 七、信 海宗俊 八、快 壽春圓
承應元、十二、十九寂 明曆三、九、一寂 延寶六、二、廿一寂 寬文六、五、十五寂

九、頼 意任識 一〇、俊 盛存仙 一一、亮 汰俊彦 一二、尊 如俊良
延寶三、七、廿二寂 延寶八、三、廿六寂 延寶八、十一、十寂 貞享元、三、六寂

一三、卓 玄源亮 一四、英 岳寛春 一五、亮 貞自春 一六、尊 祐數謀
寶永元、正、廿五寂 正徳二、十一、二寂 享保四、九、十七寂 享保二、四、十八寂

一七、隆 慶嘉順 一八、秀 慶應春 一九、信 有嘉榮 二〇、尙 彦時覺
享保四、八、六寂 享保五、七、廿一寂 享保八、十二、十五寂 享保廿一、九、一寂

二一、惠 海寛春 二二、慧 任亮辨 二三、圭 賢見龍 二四、信 恕諸圓
延享二、四、廿九寂 寶保二、五、廿二寂 寬延二、九、廿三寂 寶曆十三、十二、十九寂

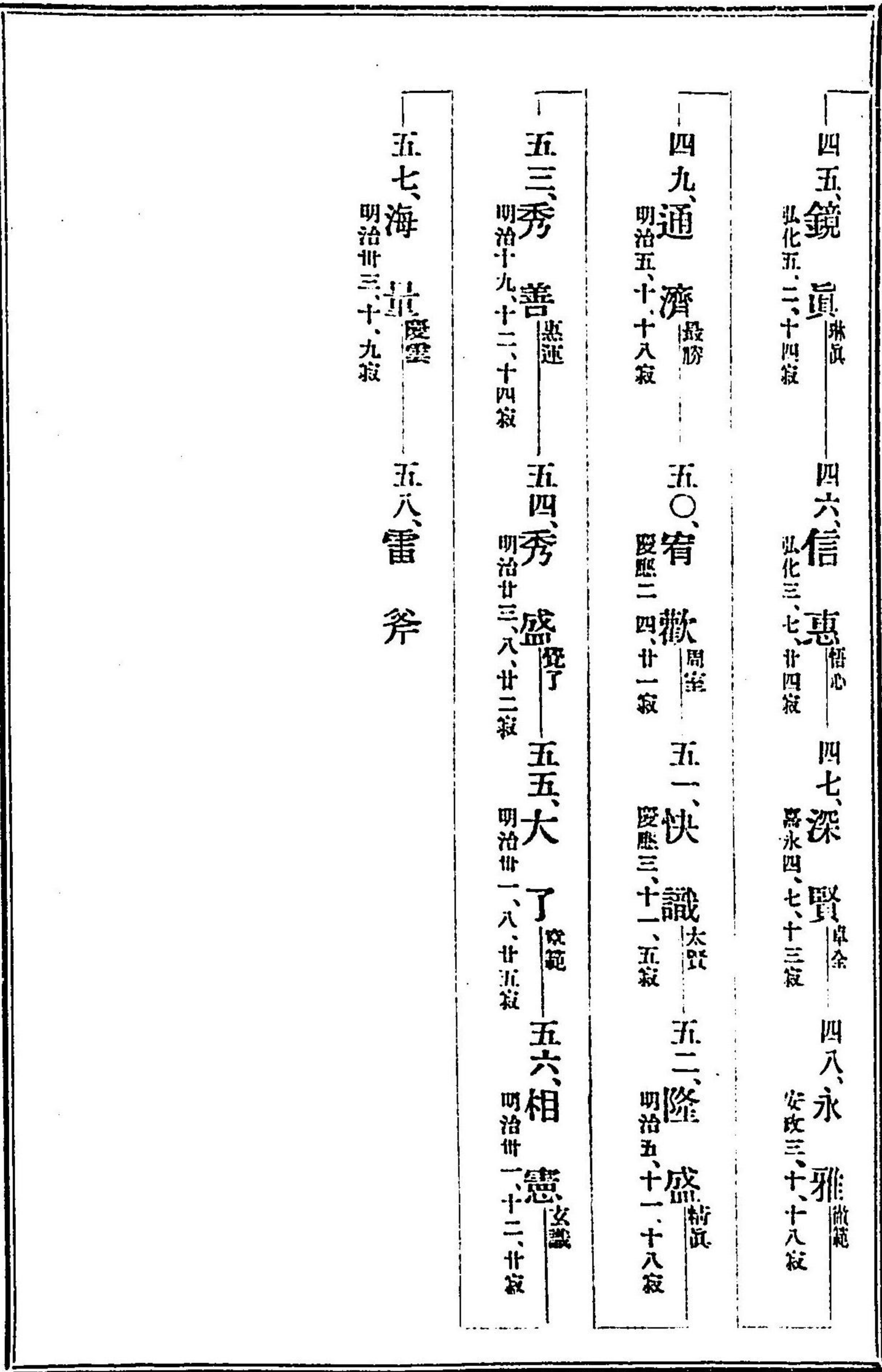
二五、性 海教任 二六、圓 秀如新 二七、快 尊賢海 二八、有 慶眞良
明和元、八、二寂 明和三十、十一、十寂 安永二、四、十五寂 安永四、九、八寂

二九、快 運音識 三〇、虛 明白心 三一、懷 玄高算 三二、法 住智懂
天明七、三、十四寂 天明八、正、廿一寂 寬政二、十一、廿九寂 寬政十二、五、十寂

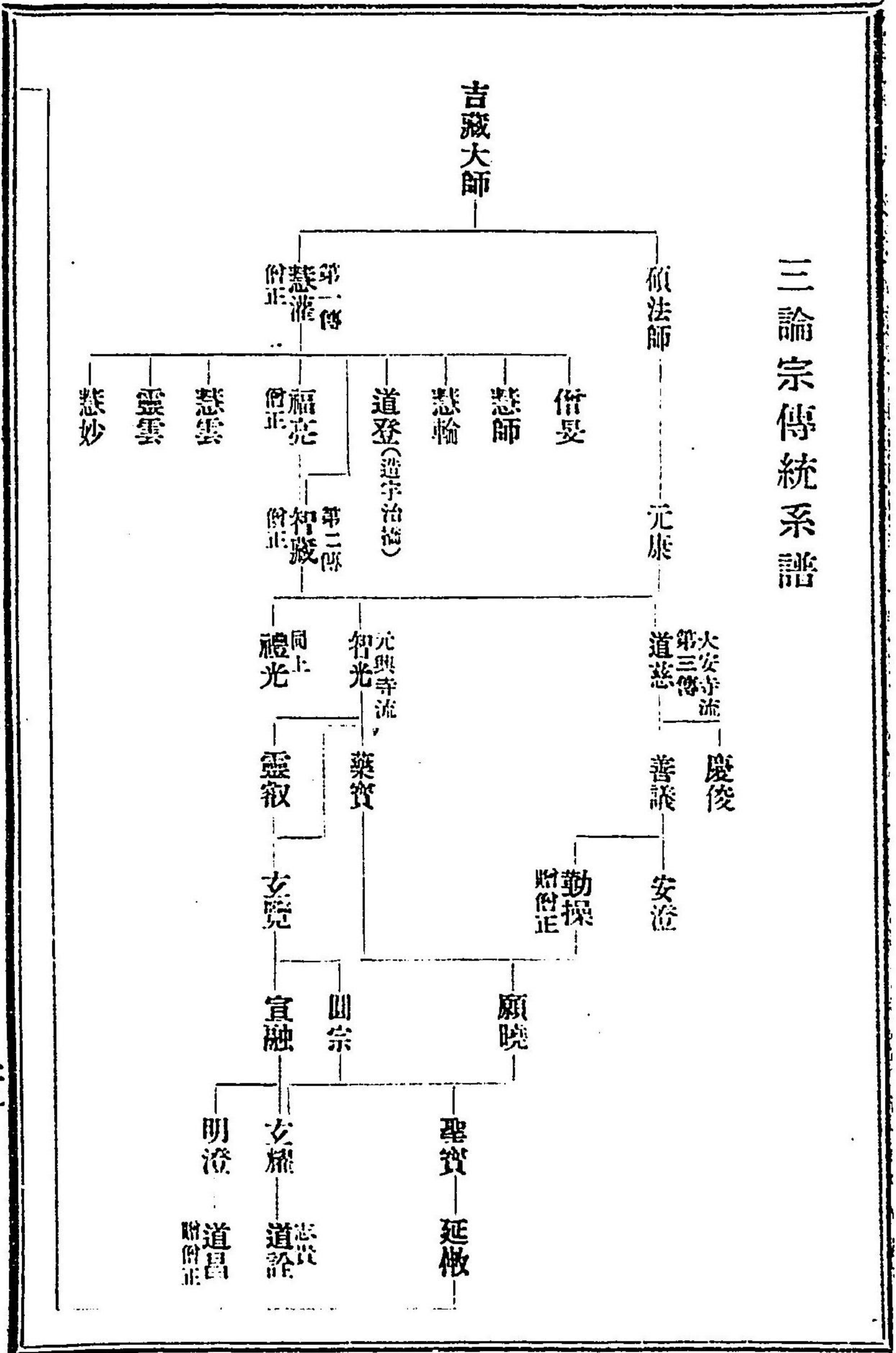
三三、儀 貞木昌 三四、元 榮本作 三五、曉 惠存詮 三六、盛 尊眞識
享和二、三、十一寂 享和二、六、十四寂 享和三、三、一寂 文化元、五、九寂

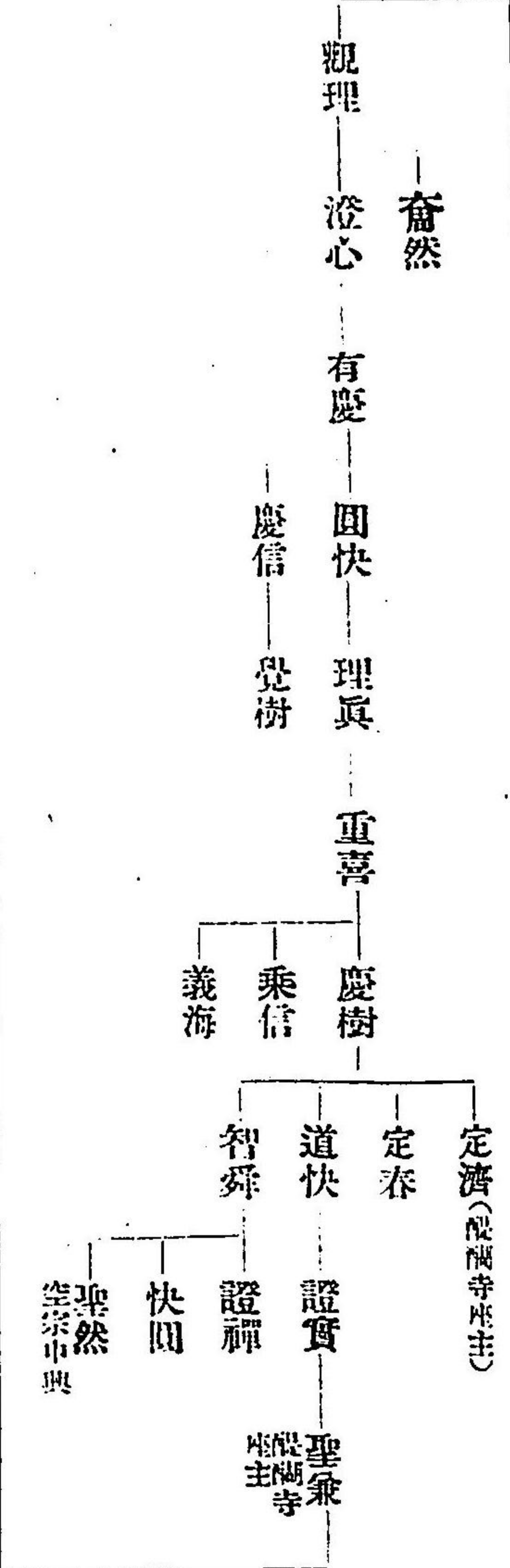
三七、高 隆實健 三八、即 同達見 三九、唯 阿傳登 四〇、亮 恭文英
文化五、七、十一寂 文化九、九、廿寂 文政六、十二、十二寂 文政十二、六、廿四寂

四一、令 法爲愷 四二、榮 山智城 四三、實 掌深識 四四、榮 明深玄
文政十、九、十七寂 文政十一、三、廿八寂 天保六、十一、三寂 天保十三、九、十九寂

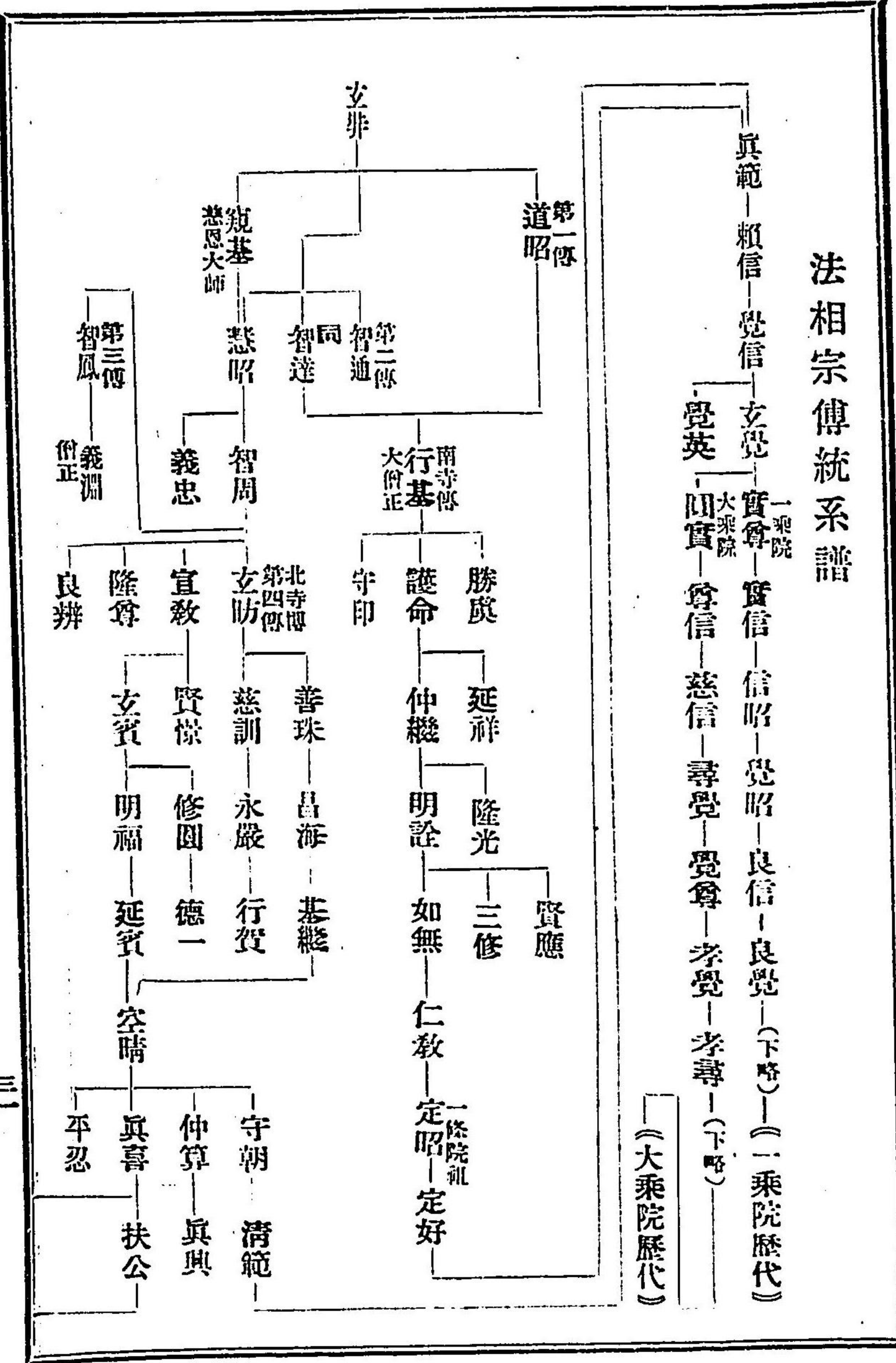


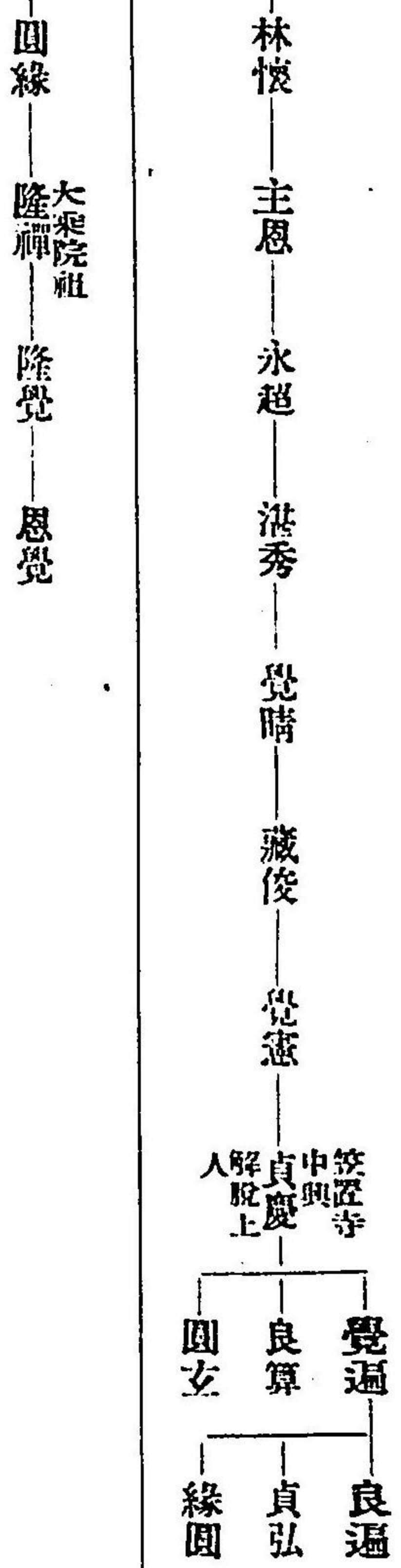
三論宗傳統系譜



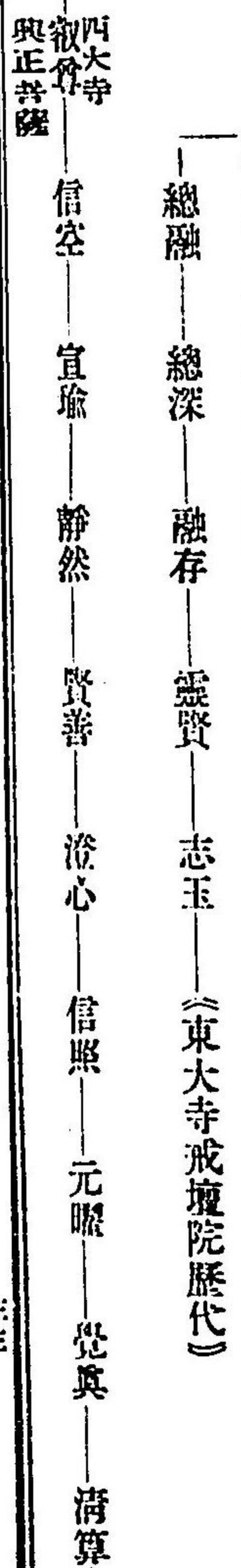
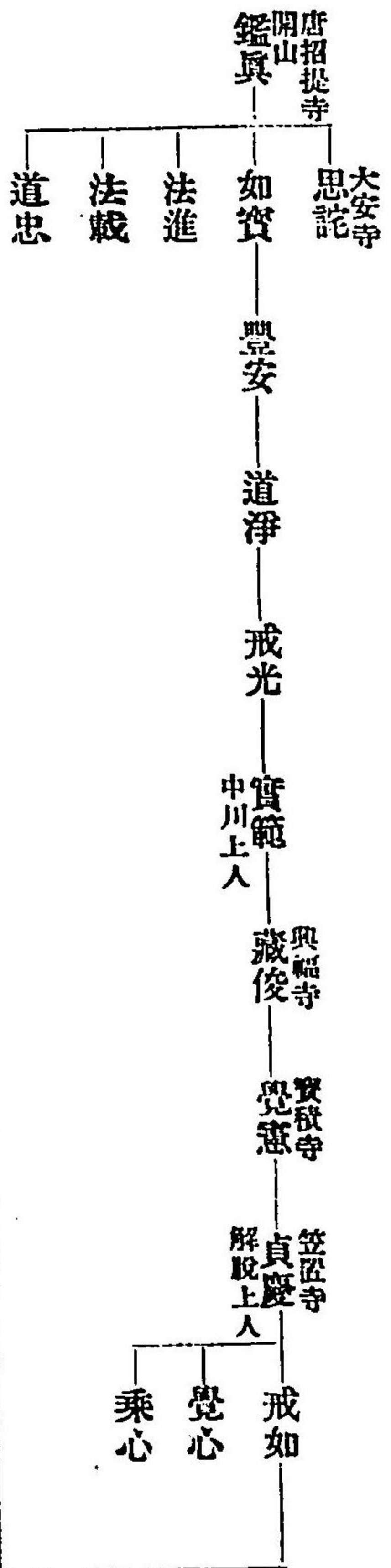


法相宗傳統系譜





律宗南京律傳統系譜



覺乘——貞祐——信尊——堯基——（西大寺歷代）

鎌倉極樂寺開山

圓晴

尊性律師

有嚴

（以上戒如門下四傑）

覺源

華嚴宗傳統系譜

審祥——良辨——實忠——等定——正進——長歲

道雄——基海——良緒——光智

松橋（經六傳）

宗性——凝然

禪爾

俊才東大寺

靈波

湛睿

總融

盛譽

觀眞（經四傳）

景雅

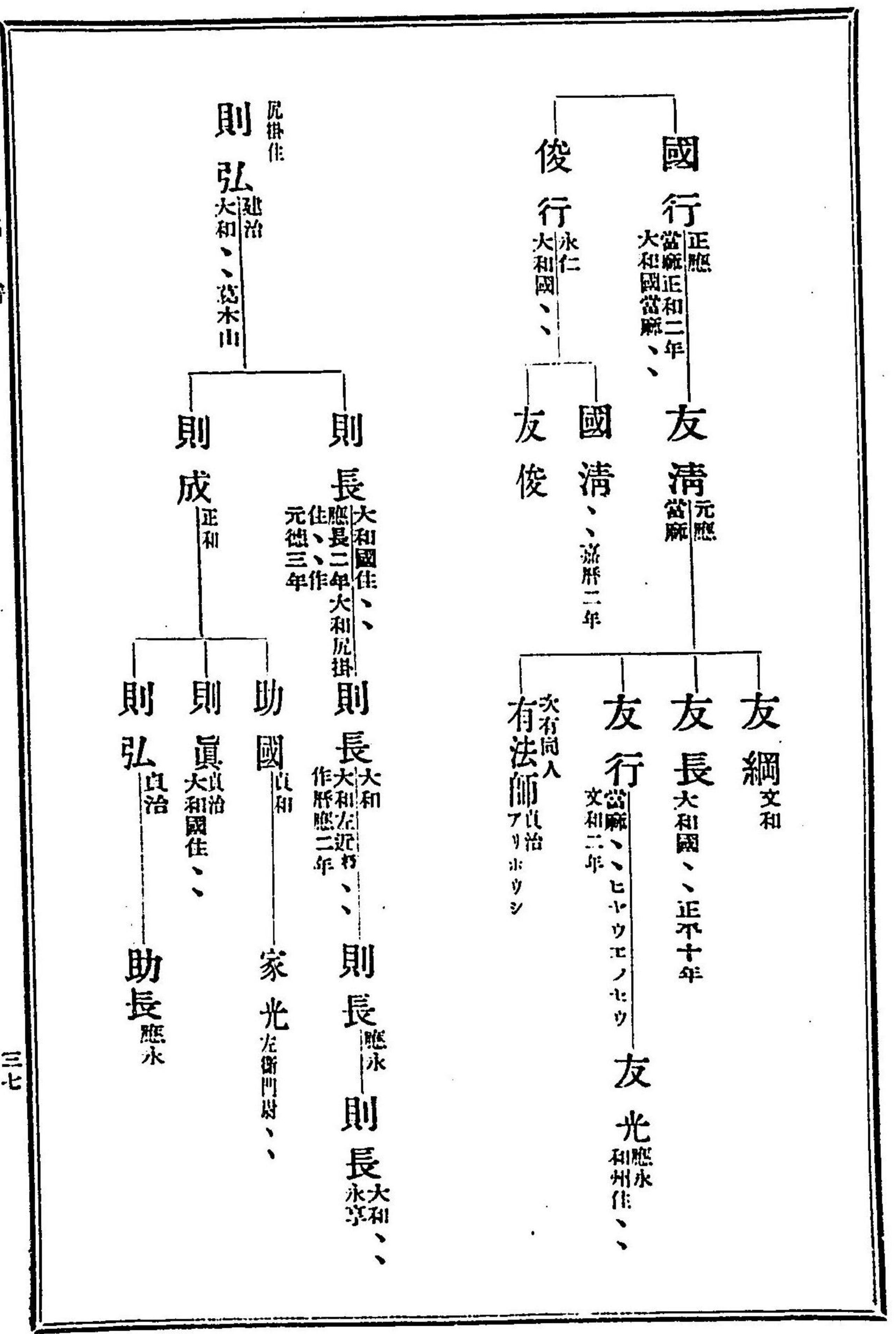
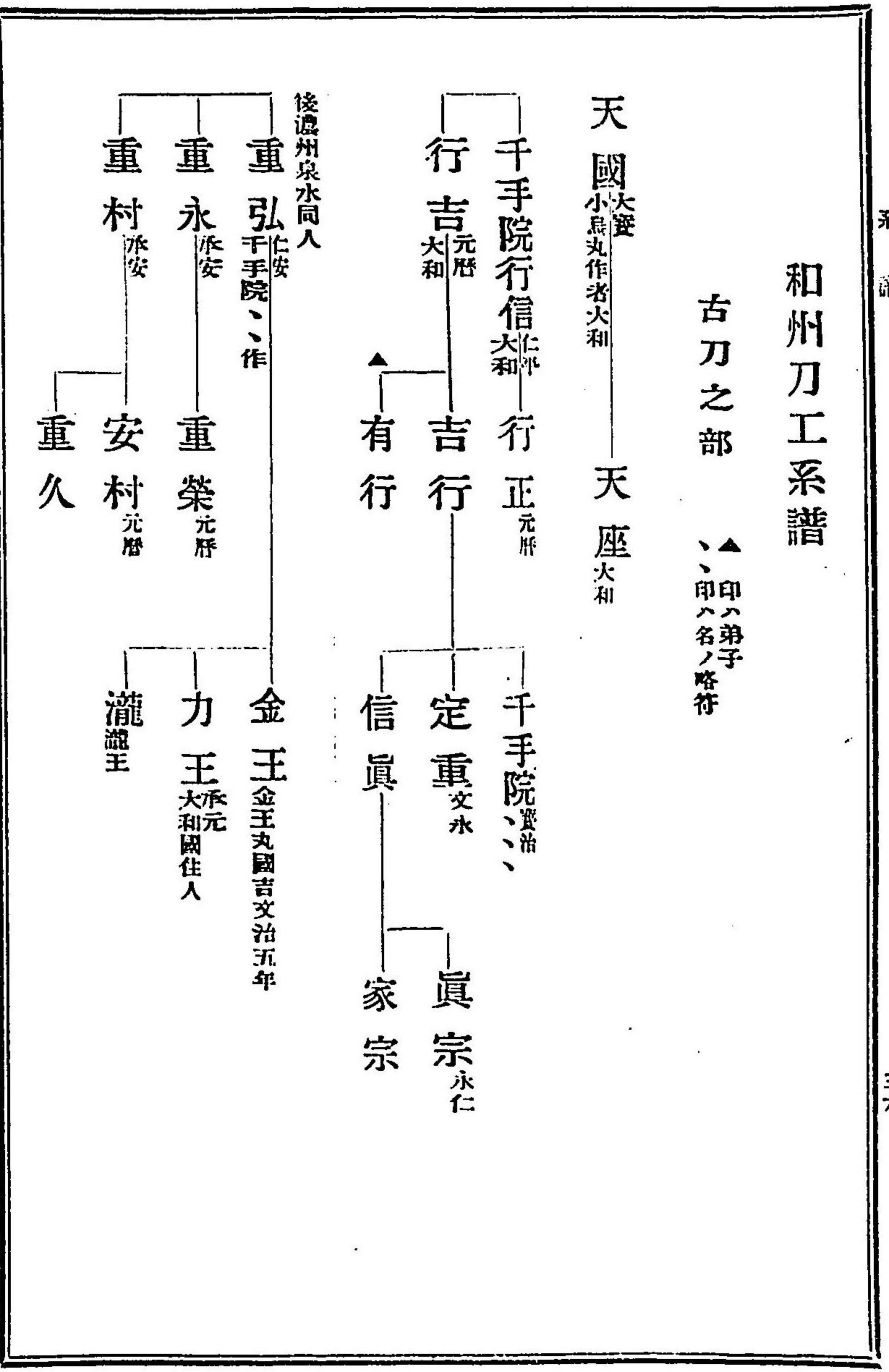
明慧辨尼

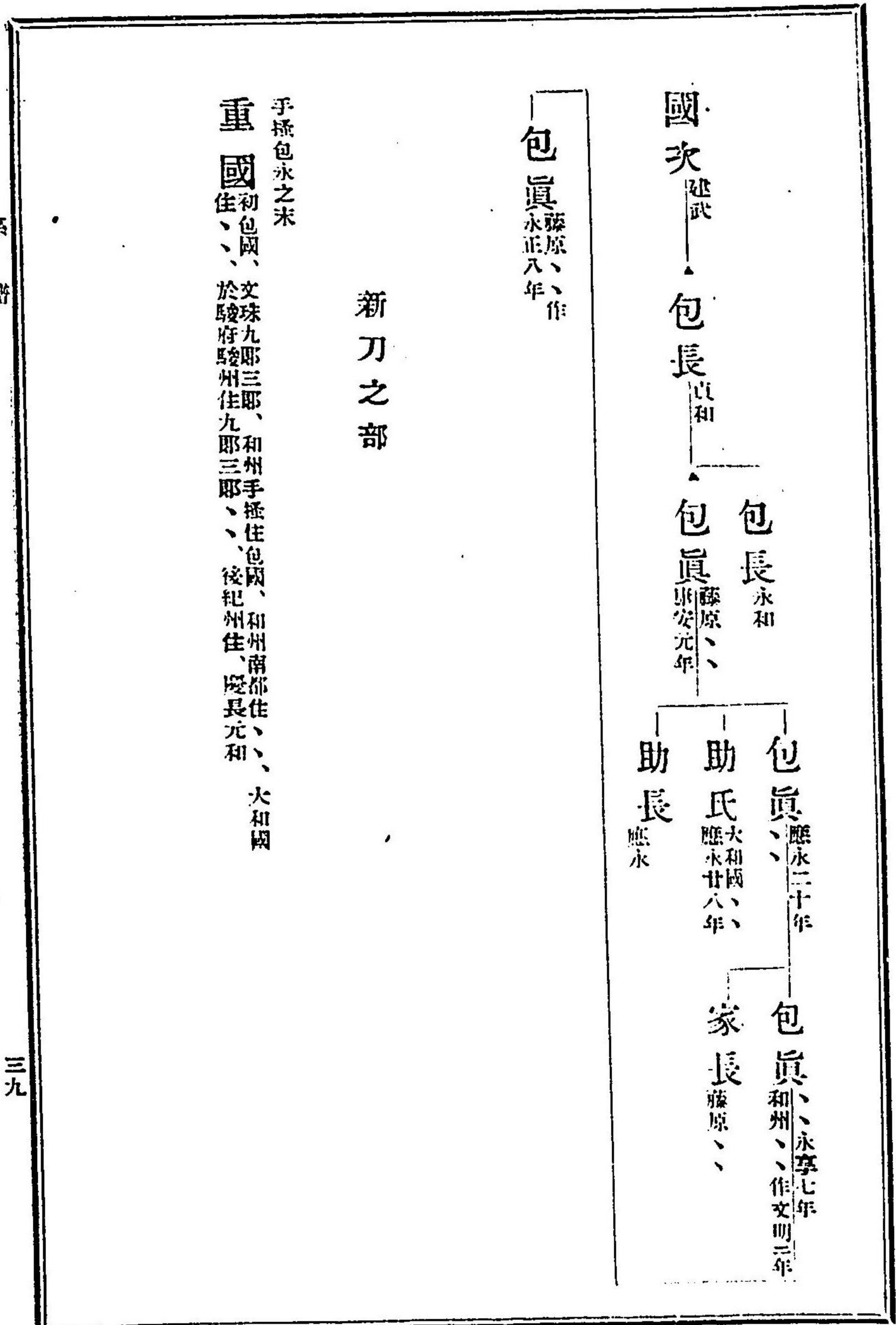
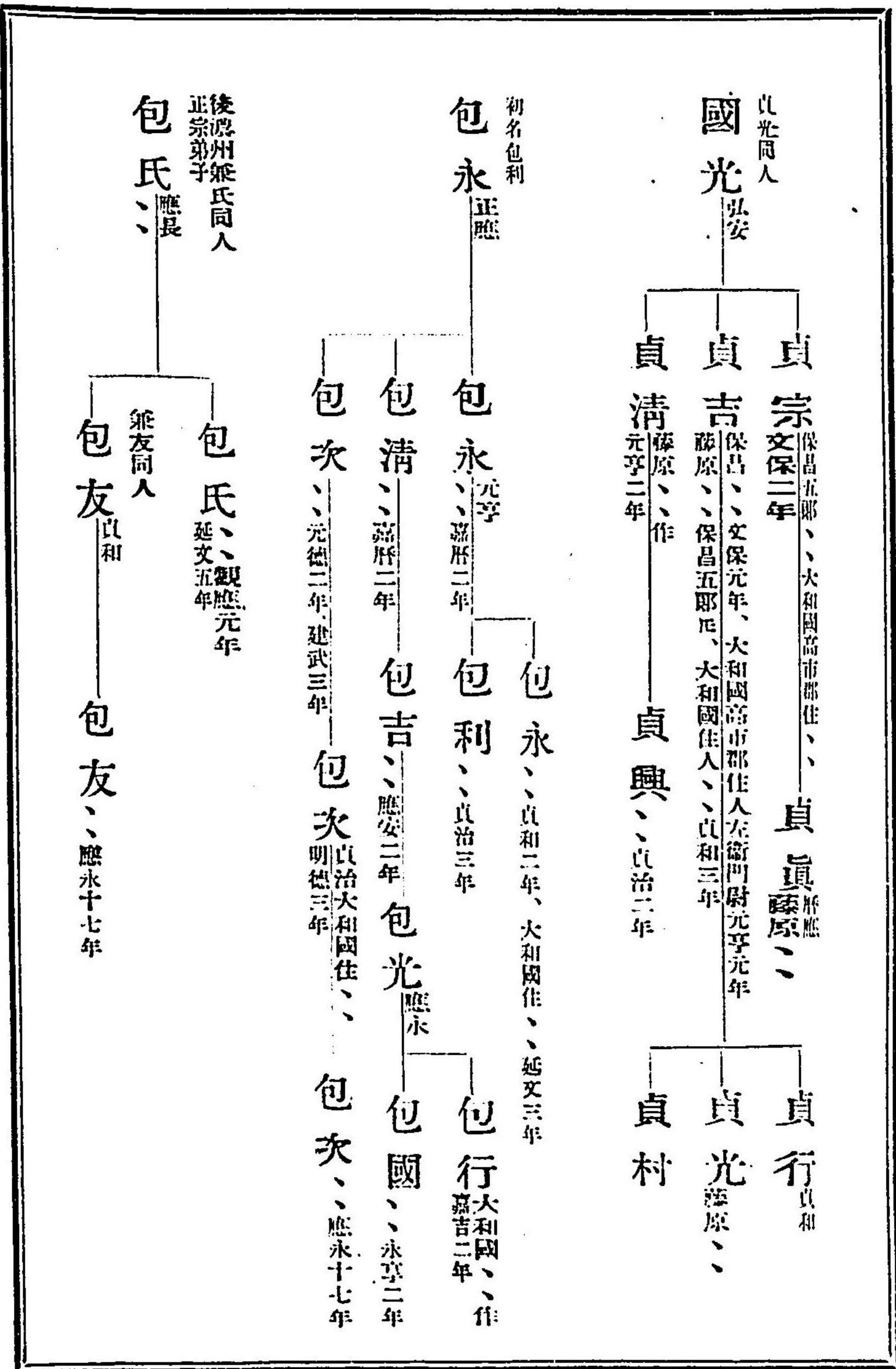
喜海

靜海

和州刀工系譜

古刀之部 ▲印ハ弟子、印ハ名ノ略符





大佛師系圖

一代 定朝 佛師元祖自是以前皆撰作而已也 法眼位
天喜元年八月一日歿

二代 學助 法眼 學助又作「覺助」

三代 賴助 法眼

四代 康助 法眼 康助又作「柔助」

五代 康慶 法眼 東大寺小佛師

六代 運慶 法印 運慶一作「雲慶」東大寺大佛師 號「備中法印」

定覺 二男法橋奈良一流始祖

快慶 安阿彌 康慶之弟子 號「丹波法眼」

七代 湛慶 法印大和尚位 東寺木大佛師 號「尼瓶法印」

奈良奉行表

永祿三—十

筒井順慶

古市播磨

松永彈正久秀

原田備中守

井上源五郎高清

大久保石見守長安

鈴木左馬助

中坊左近秀政

中坊長兵衛時祐

土屋忠次郎利次

溝口源左衛門信勝

大關勘右衛門增公

天正十三—慶長四

慶長五—

慶長十二—十七

慶長十八—寬永十四

寬永十五—寬文四

寬文四—九

寬文十—天和元

天和二—貞享二

貞享二—元祿六

元祿六—九

元祿九—十四

元祿十四—十五

寶永四—正徳元

正徳元—享保十

享保十—十一

享保十一—十四

享保十四—元文五

天文五—寶曆三

寶曆三—四

寶曆四—八

寶曆八—明和三

大關彌右衛門忠高

神尾飛騨守元知

妻木彦右衛門頼保

内田傳左衛門守政

横山左門元知

三好勘之丞長廣

中坊長左衛門秀廣

丹羽五左衛門長道

細井因幡守安明

松平一學乘有

石黒四郎兵衛易慎

神尾市右衛門元等

山本大膳雅堧

山岡五郎作景之

明和三—七

明和七—安永五

安永五—七

安永七—天明七

天明七—八

天明八—寛政三

寛政四—同

寛政五—享和元

享和元—文化三

文化三—十二

文化十二—文政元

文政元—四

文政四—天保二

天保二—七

酒井善左衛門忠高

小管猪右衛門武第

管沼藤重郎定亨

松田善右衛門勝易

小出兵庫有乘

三浦甚五郎正子

柴田七左衛門康成

加藤鞠負正修

岩瀬式部氏紀

鈴木新吉正義

川井次郎兵衛久徳

本多作左衛門重賀

井上左門正章

梶野土佐守良材

天保八—十二
 天保十二—弘化三
 弘化三—嘉永四
 嘉永四—五
 嘉永五—安政五
 安政五—文久元
 文久元—二
 文久二—元治元
 元治元—慶應二
 慶應二—明治元

本多丹下繁親
 池田將監頼方
 川路左衛門尉聖謨
 佐々木修輔顯發
 戸田能登守氏著
 根岸九郎兵衛衛奮
 桑山左衛門尉元柔
 山岡備後守景恭
 安藤駿河守次豊
 小俣伊勢守景徳

郡山高取二藩主表

郡山				高取			
氏名	受封	歿年	享年	氏名	受封	歿年	享年
小田切氏				越智氏			
豊臣秀長	天正十三	天正十九	五二	本多太郎左衛門			
豊臣秀保		文祿四	一七	脇坂安治	天正十三	承應二	七〇
(番城)				本多利長		寛永十四	四〇
水野勝成	元和元	慶安四	八八	植村家政	寛永十七	慶安三	六二
松平忠明	元和五	正保元	六二	植村家貞		元祿三	七三
本多政勝	寛永十六	寛文十一	五八	植村家言		元祿九	三四
本多政長	寛文十三	延寶七	四七	植村家敬		享保十六	五二
松平信之	延寶七	貞享三	五六	植村家包		元文三	二八
本多忠平	貞享二	元祿八	六四	植村家道		明和四	三八

柳澤保申	柳澤保興	柳澤保泰	柳澤保光	柳澤信鴻	柳澤吉里	本多忠烈	本多忠村	本多忠直	本多忠常
明治二六 四八	嘉永元 三四	天保九 五七	文化十四 六五	寬政四 六九	延享二 五九	享保八 二四	享保七 一一	享保二 四五	寬永六 四九
				植村家保	植村家興	植村家貴	植村家教	植村家長	植村家利
				明治二九 六〇	嘉永六 一九	嘉永六 四七	萬延元 七四	文政十一 七五	天明五 二七
									安永七 二七

春日神職表

時風	時兼	有影	時理	是忠	助延	祐賴	祐清	祐忠	祐尚
秀行 <small>時風弟</small>	秀基	有基	助滿	信清	有近 <small>子養</small>	有忠	延遠	遠忠	延忠
大同二年 九五	貞觀四	延長五 一一八	天曆元 九一	康保二 七九	寬治六 七六	天永二 四六	安永二 六二	貞應二 八二	寶治三 七一
祐房 <small>時風八世孫 近助次男</small>	祐重	祐明	祐茂	祐賢	祐春	祐臣	祐任	祐右	祐
仁平二 七一	建久三 七一	安貞三 八六	文永六 七二	弘安五 六二	元亨四 八〇	康永元 六八	延文三 六五	應永十七 八一	應永十 四四
辰市家 (中臣姓)	大東家 (中臣姓)	千鳥家 (中臣姓)							

祐 繁	祐 叙	祐 金	祐 次	祐 梁	祐 藤	祐 里	祐 村	祐 時	祐 有	祐 常	祐 永	祐 家	祐 氏
文祿五	天正十七	天正十四	永祿元	明應九	寛正二	文正元	(早世)	文安二	順永九	貞治六	建武五	徳治二	建長三
五二	五二	八〇	七三	四五	三三	六八	七八	七八	八三	七四	七三	六七	四四
延 致	延 相	延 種	延 通	延 能	延 有	延 光	延 雅	延 光	延 基	延 朝	延 茂	延 觀	延 秀
享保十六	永祿十五	延寶六	寛永九	慶長二		永正八	文明十七	應仁二	永享二	明德四	曆應二	正中三	正安元
二七	六七	二九	五二	七七	六〇	七八	六〇	七八	七七	八五	五九	七二	七一
祐 頼	祐 白	祐 景	祐 之	祐 忠	祐 榮	祐 尙	祐 根	祐 資	祐 智	祐 勝	祐 村	祐 富	祐 光
元祿十四	延寶七	延寶六	延寶六	寛文七	萬治二	正保二	天正十六	天文十七	大永三	明應五	寛正二	永享十一	應永二十
三八	五	七	二九	四五	五八	六四	六三	四九	四三	四五	三一	四四	二八

祐 斐	祐 興	祐 雅	祐 兄	祐 起	祐 智	祐 義	祐 用	祐 元	祐 長	祐 員	祐 泰
明治三六	明治十二	天保四	文化十三	寶曆十	寶曆七	享保九	享保五	寛文六	明曆二	慶長二十	(早世)
六五	六六	四〇	七二	三七	五九	四六	六六	一九	六五	二五	
						延 慶	延 暉	延 陳	延 賢	延 香	延 榮
						萬延元	文政五	文化四	寛政二	明和四	
						四九	五二	五七	七一	七三	
		祐 順	祐 道	祐 誠	祐 納	祐 雅	祐 益	祐 豐	祐 字	祐 字	
		明治元	嘉永四	寛政十	寛政二	明和九	明和九	正德六	正德五	正德五	
		五二	七〇	三一	五六	六一	六一	七	三八	三八	

人物年表

(列傳中に載せたるものはこれを缺く)

氏名	要記	没年	享年
轉乘	金峰山の僧、大和の人	嘉祥二	
齋部宿禰文山	大佛の首を修理す	貞觀九	四七
賢應	元興寺の僧、大和の人	同一〇	
明詮	元興寺の僧、奈良の人	同	八〇
圓載	比叡山の僧、大和の人		
承均	歌僧、大和の人		
主恩	興福寺の僧、十市の人	永祚元	五七
仁賀	多武峰の僧、大和の人		
安養	源信の妹、善書、葛下の人		
朝晴	東大寺の僧、添下の人	治安元	
觀眞	東大寺の僧、葛下の人	同六	七九

人物年表

一

延	幸	東大寺の僧、高市の人	治暦二	八二
成	尊	山城曼茶羅寺の僧、奈良の人	永保元	六三
慶	耀	園城寺の僧、大和の人		
蓮	意	高野山の僧、大和の人	長承元	
聖	仁	高野山の僧、大和の人	保延五	八二
圓	能	信貴山の僧、添上の人	仁平元	
陳	和	卿 宋の鑄工、弟陳佛壽と大佛を修補す		
草部	是助	鑄工、草部是弘、同助延等と大佛を修補す		
藏原	行隆	造東大寺長官、藏人左少辨、治承五年任命、次官、三善爲信、判官中原基康、主典三善行政、		
藤原	行隆	東大寺造佛長官、次官小槻隆職		
理	賢	高野山の僧、大和の人	建久三	七四
圓	晴	不空院の僧、大和の人、奈良四律匠の一	仁治二	六二
有	嚴	西方院の僧、奈良四律匠の一		

藤原	左馬允貞經	當麻寺厨子、蒔繪師		
如	性	菩提山の僧、奈良の人		
道	照	白毫寺の僧、奈良の人		
伊	行末	宋の石工、子伊行吉、般若寺笠卒、塔婆を建つ	正天二	
適	然	戒壇院の僧、大和の人		
元	晴	戒壇院の僧、大和の人		
宗	性	東大寺の僧、抄本多く存す		
蓮	淨	戒壇院の僧、大和の人		
官	道某	高市牟佐神社神官、五郡神社記の著者		
總	持	河内西林寺の僧、大和の人、寂尊の姪		
賴	尊	信貴山の僧、樂を善くす		
聖	守	真言院の僧、奈良の人、圓照の俗兄	正應四	七三
重	如	金剛王院の僧、大和の人	正安元	七八
藤原	助友	大工、當麻寺講堂建築		

修	廣	法金剛院の僧、大和服部の人	慶長元	八九
信	空	西大寺の僧、大和の人	正和五	八六
		壽王三郎太夫正重、唐招提寺、鷗尾製作瓦師		
		藤井友定、大工、當麻寺金堂建築		
		真木定觀、南朝の忠臣		
		薩摩法橋觀慶、奈良の畫家		
		越智元雅、高市郡越智の住、能師		
		吉祥院、假面七作の一		
		五郎宗次、法隆寺舍利殿塗師、大工		
		等、仁、加賀大乘寺の僧、奈良の人	寛正三	七七
		橋壽王太夫吉重、法隆寺三寶院瓦師		
		繼、範、藥師寺の僧、杉本の人	文明一〇	七二
		了、曉、下野弘經寺の僧、大和の人	同一五	
		長、乘、藥師寺の僧、郡山の人	同一五	七九

德	源	越前佛陀寺の僧、大和の人	明應五	七六
石	黒道提	茶人、珠光門人、南都代官		
長	懷	藥師寺の僧、葛下の人	永正一二	七六
		櫟屋順禪、畫家		
		遍、龍、十輪院畫僧		
		良、全、畫家		
		觀、盛、奈良東大寺の畫僧		
		繼、圓、藥師寺の僧、添下蓬萊の人	永祿八	八九
		行、賢、唐招提寺の僧、式下八田の人		
		後藤乘意吉正、永祿中大佛の首を修補す		
		菊屋、奈良霞酒製造		
		前田喜右衛門、晒布業、添下匹田に移住す		
		沼津久怡、奈良の釜師		
		天下一與九郎、後天下一宗四郎、天下一宗三郎、上川宗品等あり、皆奈良の風爐師		

半田、岩井、春田 奈良の具足師
 森丹後、森若狹 奈良の御用墨師、此の他、福井出羽、福井備後、大森和泉、藤村土佐、大
 墨屋但馬、甲田出雲、墨屋吉兵衛等皆奈良の墨師なり
 大 藏 金春座の役者、鼓、狂言の家、長命、金春の笛の家、中村、金春の大鼓の
 家
 中井正清 法隆寺東室、大工 慶長一七
 素 覺 河内一乗寺の僧、奈良の人
 坂口又五郎 吉野添器を興す
 武田勘解由 十津川川津の郷士、大阪役徳川に屬す
 赤垣安忠 宇陀の金瘡醫家 寛永六
 永 俊 房 奈良の連歌師 同一二 八九
 横井宗清 奈良の富豪、酒屋
 究 誦 當麻念佛院の僧、大和の人
 良 照 戒壇院の僧、奈良の人

土 丸 越前圓成院の僧、奈良の人 正保四
 了 隨 超龍寺の僧、平群田原の人 明暦元
 宗 榮 山城大徳寺の僧、大和の人 寛文六 七〇
 友 心 三輪の僧、山邊福智堂の人 同一二 七一
 道 弘 奈良の俳人、赤紫を著す
 池田正親 郡田侯の臣、俳人、池田正式の子
 岡村正辰 郡山に住す、俳人
 智 教 唐招提寺の僧、八田郷の人 延寶六 六二
 理 傳 念佛寺の僧、戸毛の人 同八
 龍造寺平馬 郡山本多侯の臣、勇士
 田代松意 俳人、大和の人、談林軒と稱し、江戸に住す、江戸談林派の名流
 熊澤藩山 儒者、曾て郡山侯に仕へ、矢田に住す 元祿四 七三
 良 雄 比叡山の僧、十市の人 元祿六 五九
 杉山和一 鍼醫、大和の人 同七 八二

深如海院圓照寺宮第一代、後水尼天皇第一の皇女	同十	七九
細井知名 郡山に住す、陵墓荒廢を嘆す	同	四二
大石瀨左衛門 四十七義士の一、曾て奈良東向中町に住す	同	一六 二七
金春八郎元喜 能師	同	七〇
西莊作之進 春日雜司、醫を善くす		
廣濱彌左衛門 奈良鍋屋町大佛鑄物師、名は國重、一に廣瀨に作る		
廣濱彌兵衛 同上、彌左衛門の子、名は國定		
堀内員長 大佛建築棟梁、筑後少椽と稱す		
堀内滿政 同上、市郎右衛門と稱す		
佐藤三左衛門 郡山の金魚養殖家		
爲川肥後介 奈良の假面工		
岡田寛齋 奈良の儒者	正徳三	八〇餘
邑井道弘 奈良の俳人、赤紫及南都名所集を著す	享保元	六五
隆 長谷寺の僧、添下の人	同四	七一

隆 光 江戸護持院の僧、添下二條の人	同九	七六
涼風軒宗益 春日御廊承知、團扇の名工、多藝	同	
櫻井元茂 郡山の歌人、漢學者		
平泉鬼貫 俳人、曾て郡山に住す	元文三	七八
杉村甚四郎 十市大福の天文家	寶曆九	六三
杉村甚次郎 甚四郎の弟、易學者		
圓 秀 長谷寺の僧、奈良の人	明和三	八一
快 尊 長谷寺の僧、添上番條の人	安永二	七一
有 慶 長谷寺の僧、宇智牧野の人	同四	六七
中野鳥山 高取藩儒	寛政七	
法 住 長谷寺の僧、添上の人	同一二	七八
奥中彌治兵衛 添上郡室津の人、山葵栽培	享和元	
盛 尊 長谷寺の僧、宇智野原の人	文化元	
筒井長四郎 奈良の菓子青丹吉製造家		

覺	潭	河内大念寺の僧、平群の人	文化十二	六八
橋井儀	陳	奈良の書家、葛山と號す		
瀧世	修	奈良の儒者、書を能くす、草山と號す		
正	受	順照寺の僧、山邊向淵の人	天保二	六一
榮	明	長谷寺の僧、芝村の人	同十三	
服部藤	平	吉野漆器を興す <small>弟小田芳太郎 人梶井勝次郎</small>		
植田吉兵衛		高市新堂の人、浮孔村耕地開墾		
楠本	榮	郡山の孝女	嘉永四	三七
西發志院潛	蘆	興福寺の書僧		
飯岡秀	安	書及び歌を善くす	安政三	七五
詮	海	常樂寺の僧、山邊筑紫の人、碑田和尚	萬延元	六七
安田鐵	造	高取藩士、天誅組殉難	文久三	
華嚴院文英		興福寺慈眼院主、郡山の人、勤王家	元治二	三五
宥	歎	長谷寺の僧、式上笠村の人	慶應二	

岡本富次郎		高田の國學者、振瀧録を著す	明治四	七二
奥田木白		郡山の陶工	同六	七二
油屋興助		奈良の忠僕、明治二年賞賜	同年	
細川清次郎		宇陀郡下芳野村の孝子、明治三年賞賜	同二	五四
奥田木白	代二	郡山の陶工、初代木白の子	同	六八
安井彌平		法隆寺の瓦工	同	一七
永井しか		磯城金澤の孝子、明治六年賞賜、盲人にして裁縫を能くす	同	二〇
鈴木亮	慧	松山の宗教家	同	二一
阪口庄平		陵西村市場村の人、村治功あり	同	二三
中島與平		櫻井の俳人、水石と號す	同	二四
鼓阪荐海		東大寺の僧、伽藍の維持に力む	同	二六
福田友市郎		天誅組に盡力す、上北山白川の人	同	二七
中津川兵庫之助		志士	同	二八

松尾四郎三郎 公共事業

明治二六 七五

森岡有聲 櫻井の畫家

同二七 六六

恒岡直史 大阪府會議長、公共事業に盡力す、柳本の人

同二八 五四

岡上莊三郎 宇陀郡關戸村の孝子

同

辰巳かめ 磯城郡平野村大網の孝子、明治二十九年賞賜

同三一 五二

岡野源三 生駒郡安堵、六十年前梨子を栽培す

同三三 八四

森岡勘兵衛 後勘治郎、宇陀郡拾生村の孝子、明治三年受賞

同

玉井半造 奈良西坂の孝子、明治三年賞賜

同三四 五七

大橋徳太郎 奈良餅飯殿の孝子

同三五 四七

栃谷よし 十津川小山手の孝子、明治十八年賞賜

同 六三

田中甚八 奈良南半田の孝子、明治三年賞賜

同三六 五二

認屋常次郎 奈良南半田の孝子、明治三年賞賜

同 五二

山まつ 生駒郡秋篠の忠婢、明治二年賞賜

同三七 七四

住岡久藏 宇陀郡高井の孝子、明治三年賞賜

同

本山和助 宇陀郡拾生村の孝子、明治三年賞賜

同三八

森田與三郎 奈良宿院の忠僕

同三九 六四

吉田宇平 高市郡新澤村の孝子

同四一

喜三郎 山邊郡田村の孝子、明治三年賞賜

増藏 山邊郡合場村の孝子、同

孫助 山邊郡九條村の孝子、同

半治郎 山邊郡小原村の孝子、同

喜三郎 山邊郡針ヶ別所村の孝子、同

伊右衛門 磯城郡南浦村の孝子、同

市兵衛 磯城郡南浦村の孝子、同

楢市 磯城郡三輪村の孝子、同

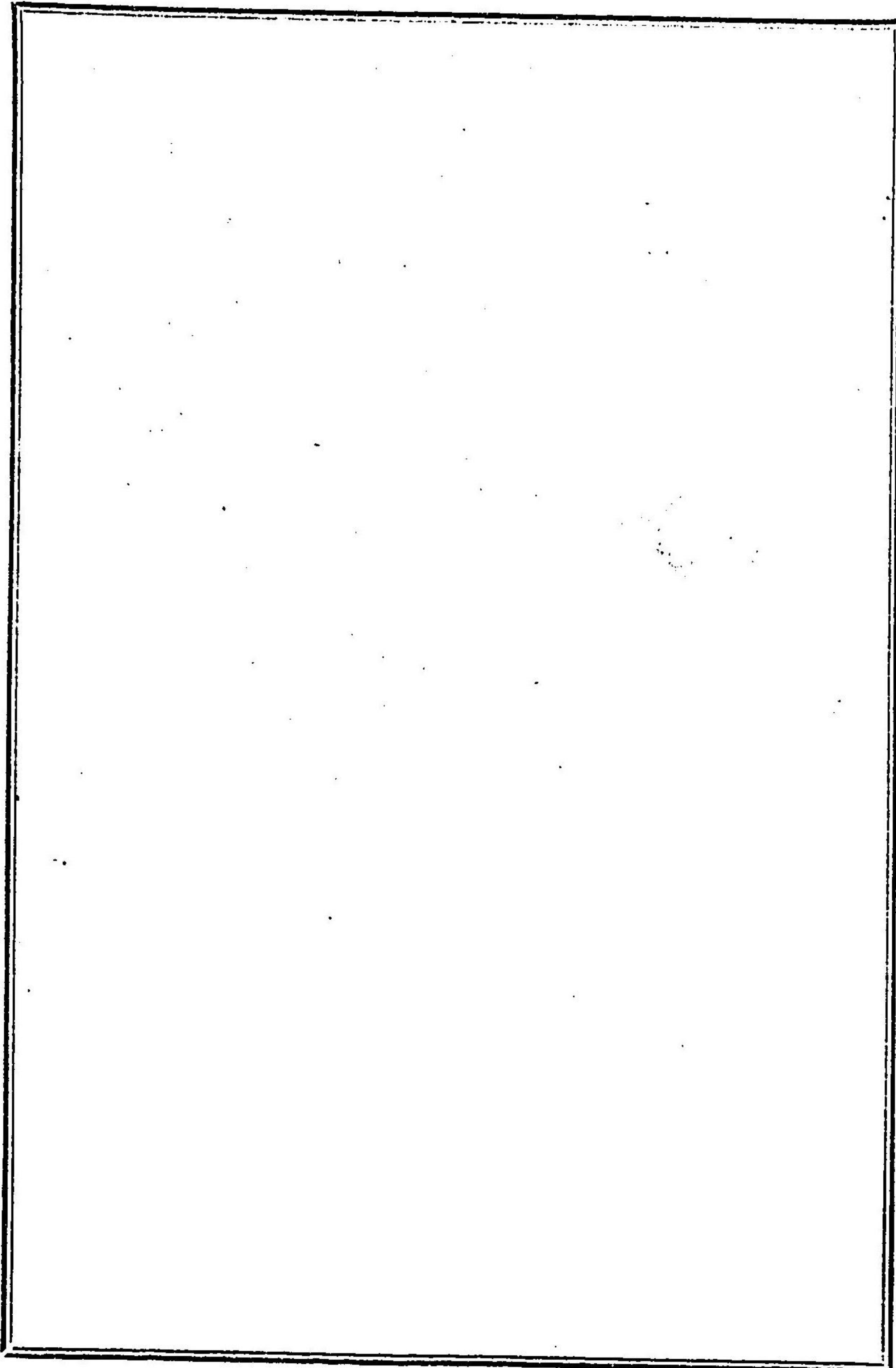
直治郎 磯城郡三輪村の孝子、同

儀藏 磯城郡三輪村の孝子、同

おめ 磯城郡辻村の孝子、同

松 治 郎 磯城郡辻村の孝子、明治三年賞賜
 庄 助 宇陀郡下守道村の孝子、同
 爲 八 宇陀郡下守道村の孝子、庄助の弟、同
 大久保 孫七 宇陀郡上守道村の孝子、同
 早田 爲右衛門 宇陀郡上守道村の孝子、同
 は や 宇陀郡内牧村の孝子、同
 喜 三 郎 宇陀郡福智村の孝子、同
 權 八 宇陀郡足立村の孝子、同
 庄 三 郎 宇陀郡關戸村の孝子、同
 伊 助 宇陀郡萩原村の孝子、同
 松 山 源 七 宇陀郡東郷村の孝子、同
 上 川 榮次郎 同上、源七の弟、同
 城 山 勘 七 宇陀郡神戸村の庄屋、孝義、同
 り 系 宇陀郡拾生村の節婦、同

直 兵 衛 高市郡今井村の孝子、明治三年賜賞
 石 松 北葛城郡當麻村の孝子、同
 忠 次 郎 北葛城郡竹之内村の孝子、同
 喜 右 衛 門 北葛城郡當麻村の孝子、同
 し や う 北葛城郡高田村の節婦、同
 た つ 吉野郡上市村の孝子、同
 さ よ 吉野郡上市村の節婦、同
 つ き 宇陀郡下井足の孝子、同
 植 村 茂 三 郎 生駒郡安堵村の孝子、同



明治四十二年八月十五日印刷
明治四十二年八月二十二日發行

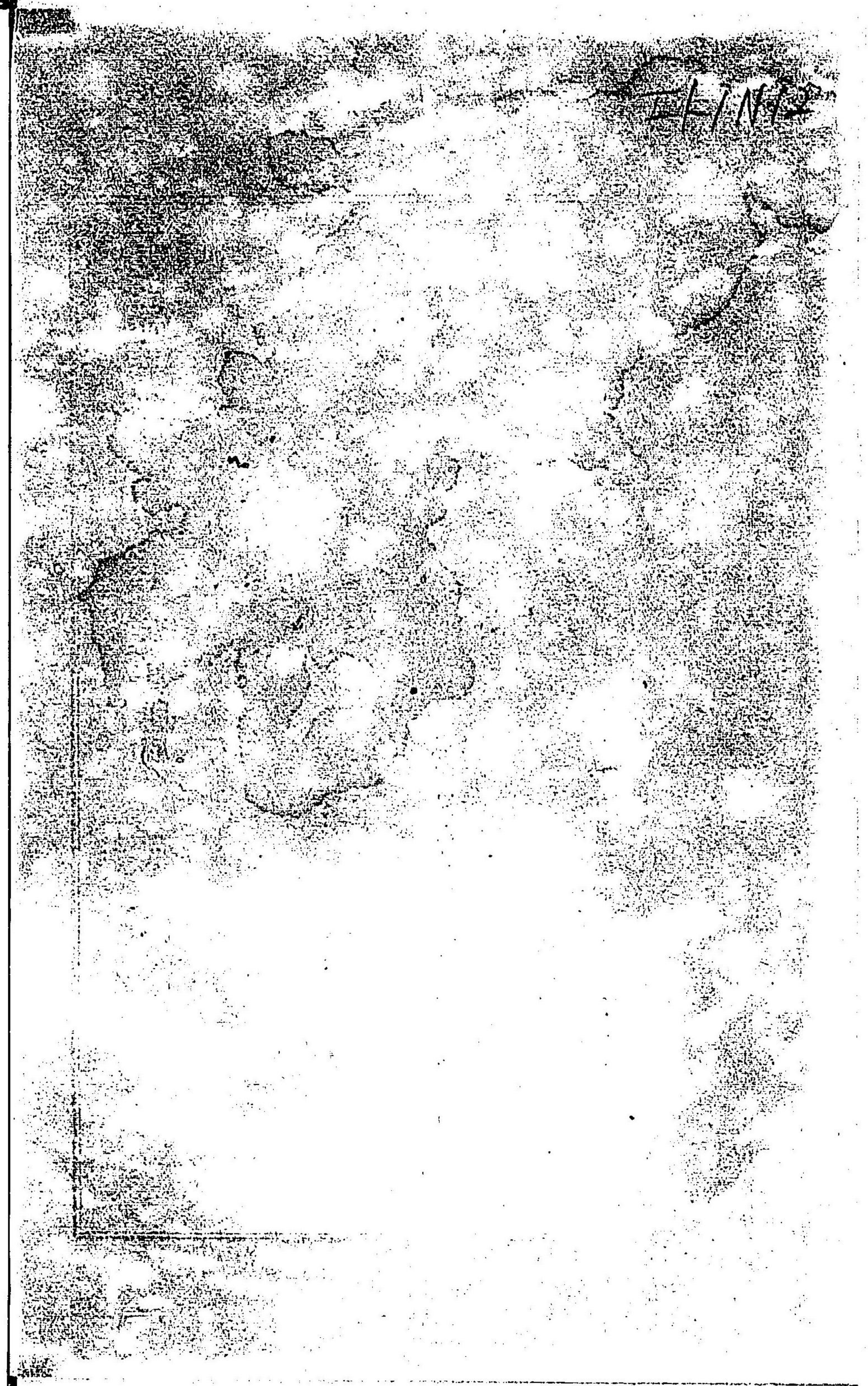
奈良縣廳

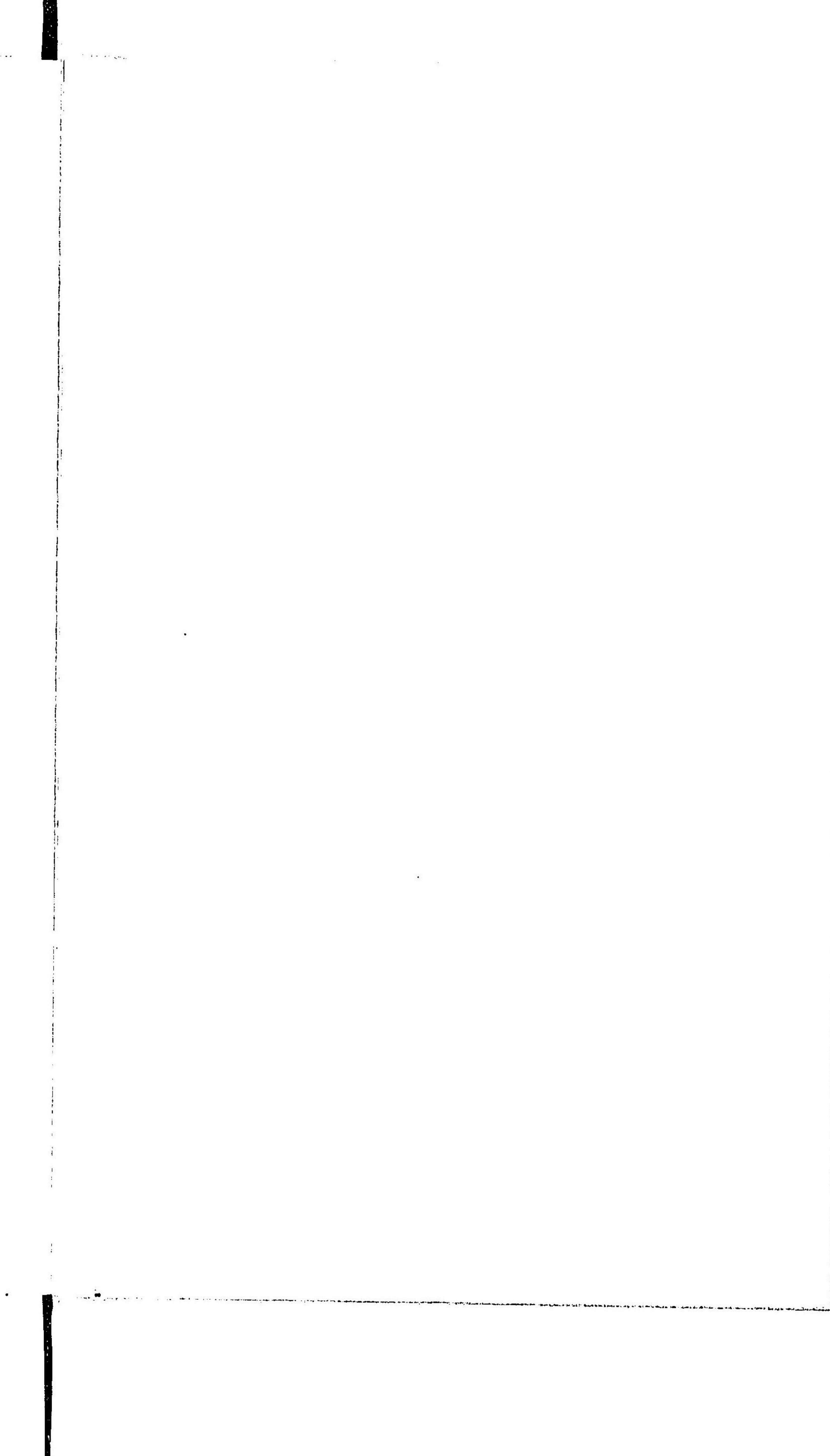
東京市神田區美土代町二丁目一番地

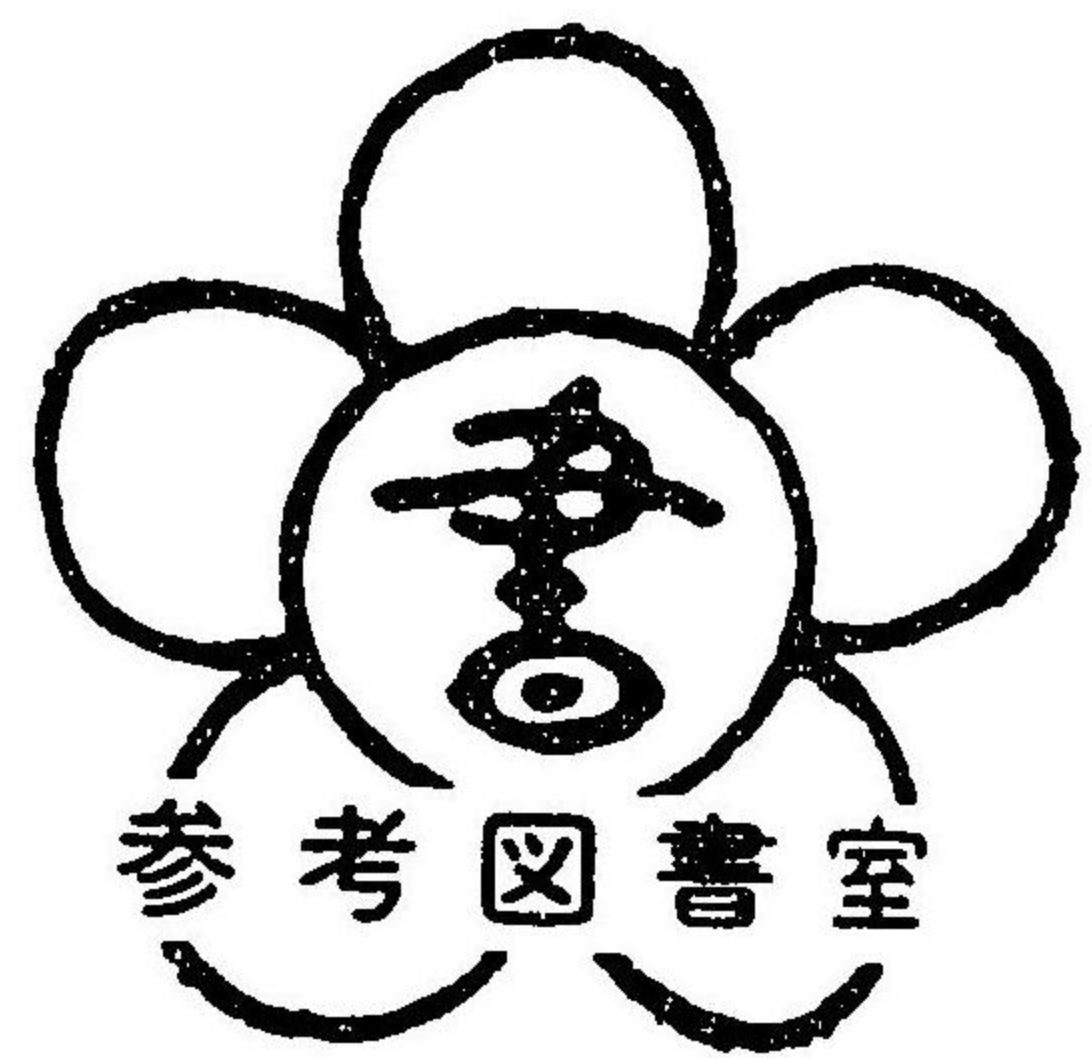
印刷者 白土幸力

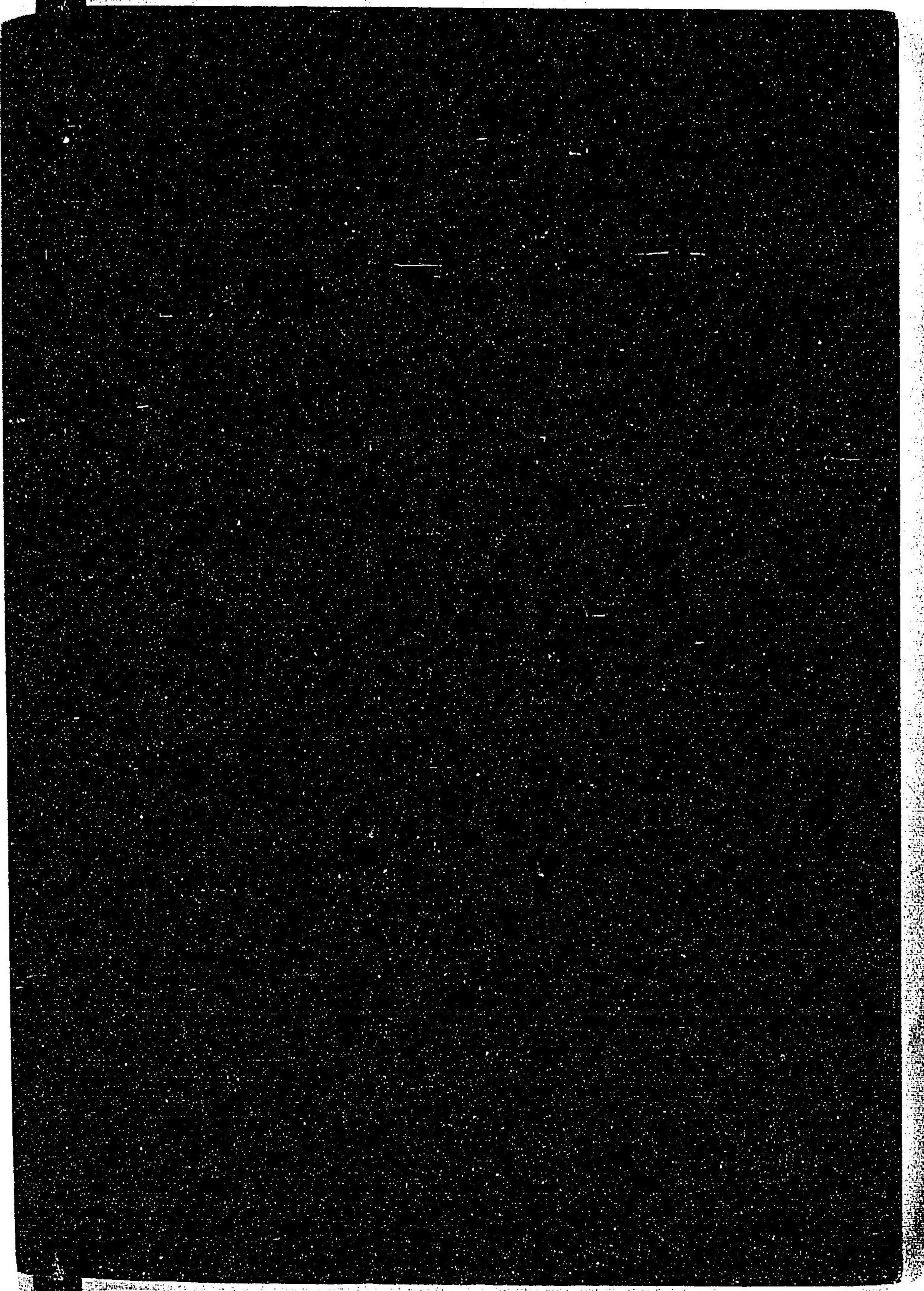
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三光堂











005144-000-6

281.65-N636y

大和人物志

奈良県庁

M42

ACE-1980



